

II

—

体験活動の調査と分析

はじめに

本プロジェクトの体験活動のうち、母子生活支援施設Aにおいて、2019年10月11日から2020年2月14日までの期間に、各1時間程度、計10回実施されたダンスワークショップを調査対象とし、新たな分析方法を用いて調査・分析を行った。1. 調査の対象・方法・倫理的配慮、2. エスノメトリー法による調査結果、3. 調査結果のまとめにより報告する。

〈調査責任者：内田桃子(大阪大学大学院人間科学研究科・院生)〉

1. 調査の対象・方法・倫理的配慮

(1) 倫理的配慮

この調査に協力することによって、参加者が何らかの不利益や苦痛を被ることのないよう、取得したデータについては、以下のことに注意して取り扱った。

◎取得した映像データや音声データは本プロジェクトにのみ使用する。

◎調査結果を報告・公開する際はワープロ等で文字に起こしたものを使用し、実際の映像や音声は公開しない。

◎在籍学校や人名などの個人情報に関わる発言があった箇所は、文字起こししたものであっても使用しない。

◎やむを得ず使用しなければならない場合は、「A学校」「B施設」という仮称や、「Cさん」「Dくん」のような仮名で表記する。

◎その他、この調査に協力することで個人が特定されたり公開されたりすることが一切ないよう十分に配慮する。

以上のことを参加者およびその監督者に説明し、同意を得たうえで調査を実施した。

(2) 調査対象

母子生活支援施設Aで行われたダンスワークショップ

ワークショップへの参加者(施設に暮らす子どもたち)の内訳及び参加日は以下の通りである(個人名に代えてアルファベット表記とした)。なお、このワークショップへの参加は子どもたち自身の意志によるものであり強制によるものではない。

表1に示す通り、出席回数が計10回の内5回以上である子どもが20名中12名であるため、調査対象となった集団は必ずしも同質であるとは言えない。他方、各回の参加者は、一部中途退室や途中参加の児童が含まれるとはいえ、ほぼ同質集団であると見なすことができる。したがって、以下に示す調査結果のうち、とくに数値の長期的推移に関わる記述は、あくまでもナビゲーターに近い視点から、参加者の構成の違いにもかかわらず捉えられた、ワークショップの全体的な雰囲気の変化を示すものすぎない。

(3) 調査方法

本調査では、新たに開発した「エスノメトリー法」によって、ダンスワークショップに参加した子どもたちの可視的行動を測定した。エスノメトリー法の開発者および本調査における測定・分析者は、藤川信夫(大阪大学大学院人間科学研究科・教授)である。

その一般的特徴は以下の点にある。

(一)実践家における調査の負担を軽減する。

(二)「実践家の主観的印象にすぎない」と見なされがちな実践の成果を数値で客観的に示すことができる。

(三)映像資料を用いるため、言語表現を媒体とする調査(アンケート調査、インタビューを含む)が困難な対象(心理的障がいをかかえる者、高齢者、幼児など)について測定が可能である。

(四)実践の短期的及び長期的変化を数値で示すことができる。

表1:ワークショップ参加者

名前	性別	学年	1回目 10/11	2回目 10/19	3回目 11/02	4回目 11/09	5回目 12/14	6回目 12/20	7回目 1/17	8回目 1/18	9回目 2/8	10回目 2/14	出席回数
A	男	小学校低学年	途中参加	●	●	●	●	途中退室	●	●		●	8
B	男	小学校低学年	●	●	●	●	●	●		●		●	8
C	女	小学校低学年		●	●	●	●	●		●		●	7
D	男	小学校低学年	●			●	●		●		●	●	6
E	男	小学校中学年	●			●		●	●			●	5
F	女	小学校中学年	途中参加	●	●	●	●			●			5.5
G	女	小学校中学年	●	●		●		●	●	●	●	●	8
H	男	小学校中学年	早退			●		●	●			●	4.5
I	女	小学校中学年	途中退室			見学		見学	見学			●	4.5
J	女	小学校中学年					●	●	●				3
K	女	小学校中学年										●	1
L	女	小学校中学年	●	●	●				●			●	5
M	女	小学校中学年						●					1
N	女	小学校中学年							●				1
O	男	小学校中学年	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	9
P	男	小学校中学年	●	●		●		●	●	●	●	●	8
Q	男	小学校高学年		●						●			2
R	男	小学校高学年	●	●		●	●	●	●	●	●	●	9
S	女	小学校高学年	●	●	●	●		●				●	6
T	女	小学校高学年										●	1
男/女=9/11			13名	11名	7名	13名	8名	13名	12名	9名	5名	14名	102.5

エスノメトリー法の標準の手順は以下の通りである。

(一)高画質のビデオカメラによる実践の様子の撮影

遮蔽物ができるだけない状態で実践全体の様子を記録できる場所にビデオカメラを設置してもらう。カメラの台数、アングル、ズームは自由に設定可能であり、また実践の途中で設置位置を移動させたり、アングル、ズームの設定を変更することも可能。調査者が撮影に立ち会う必要はない。

(二)調査者による実践家へのショートインタビュー

ナビゲーターが測定したい対象の変化(このケースでは自己肯定感の向上)を示すと考える可視的行動指標を列挙してもらう。その指標の設定に際してはナビゲーターの主観を最大限に尊重する(その信頼性が科学的に検証された尺度と一致させなくてよい)。また、実践の途中あるいは終了後に回ごとの指標を変更したり、指標数を増減させることも可能である。

(三)撮影された動画データを、一定間隔ごとの静止画に変換する。

(四)各回の実践の特定の時間帯(開始からの5分間、半ばの5分間、終了前の5分間など)に属するすべての静止画について、(a)行動特徴を確認可能な全人数、(b)特定の行動指標を示す人数をそれぞれカウントする(測定作業のために十分な時間がある場合には、特定の時間帯を設定せず、各回の実践の全体について同様の作業を行うことも可能である)。

(五)各回の各時間帯ごとに、(a)及び(b)の延べ人数を計算する。

(六)各回の各時間帯ごとに、(a)に占める(b)の割合をパーセントで示す。

(七)これらの数値(パーセント)を用いて、短期的及び長期的な指標の変化をグラフ(折れ線グラフ)で表現する。

なお、以下の方法によって、データの客観性や精度を向上させることができる。

(一)静止画を対象とするカウント作業を複数者が担当することにより、データの客観性を向上させる。

(二)ビデオカメラの台数を増やすことによって、あるいは／および、測定対象となる動画を静止画に変換する際の間隔を密にする(例えば10秒毎を6秒ごとにする)ことで、測定結果の精度を上げることができる。

(三)動画資料が存在する限り、上記2点については設定を変更して何度でも測定し直すことができる。

(4) 母子生活支援施設Aでのダンスワークショップの調査に用いた具体的方法

母子生活支援施設Aで実施されたダンスワークショップについては、以下の設定でエスノメトリー法による測定作業を行った。

(一)ビデオカメラ1台で撮影を行い、動画を6秒間隔で静止画に変換した(1分あたり10枚の静止画)。

(二)約1時間のワークショップのうち、開始から5分(00-05分)、半ばの5分(25-30分)、最後の5分(50-55分)を測定対象とした(各時間帯につき50枚の静止画を測定対象とした)。

(三)ワークショップがある程度進んだ段階(1月13日:第6回と第7回の間)で、ナビゲーターからのショートインタビューにより、参加者

である子どもたちの自己肯定感を表現する行動指標として以下の5点を設定した。

①部屋の壁から離れる。

②施設職員から離れる。

③ナビゲーターに視線を向ける。

④ナビゲーターに自ら話しかける。

⑤ナビゲーターに対して独自の身体表現をして見せる。

さらに調査者は、これらの指標に加えて

⑥参加者全員による活動への積極的参加

の指標を参考のために設定し、合計6つの指標につき測定を行った。

(四)測定者は調査を担当した藤川信夫1名である。

(五)静止画だけで行動特徴を特定することができない場合に限り、補助的に、該当箇所の動画を参照し前後の流れから行動特徴の確認を行った。

本調査では、エスノメトリー法とともに、トライアングレーションとして実施したナビゲーター及び施設職員に対するインタビューの記録(P30-P40に付した資料)を必要に応じて参照した。

2. エスノメトリー法による調査結果

10回のワークショップにおける各3つの時間帯における、6つの指標の出現頻度はP24の(表2)に示す通りである。

(1) 全回の6つの指標の短期的及び長期的変化

(表2)に示した数値の変化を折れ線グラフで表現するとP25の図のようになる(図1-1及び1-2)。なお、ワークショップ間の時間的隔たりは、最長で第4回目と第5回目の間で1か月以上、最短で第7回目と第8回目の間で1日と多様であるが、このグラフではこの時間的隔たりの大小を表現していない。

(一)各回における第一指標「部屋の壁から離れる」の変化(短期的変化)

これらの表と図を見る限り、10回のうち第1回目を除く9回のワークショップにおいて、最初の5分間から半ば5分間の時間帯にかけて第1指標の割合が増加していることがわかる。この指標の変化は多くの子どもたちがワークショップへの参加を回避している状態から自発的に活動に参加しようとする状態へと変化したことを示す。なお、静止画、動画のいずれを見ても、ナビゲーターが子どもたちに参加を強いる場面は見られなかった。他方、第3、4、5、10回のワークショップにおいては、ワークショップ最後の5分間にこの指標を示す数値が減少していることがわかる。映像データからはワークショップ終盤で行われるミーティングや「クールダウン」等のため参加者の活発な動きが見られなくなることが、あるいは、ワークショップ後に行われたインタビューの記録からは「集中力を保つのが難しい」(第10回目:ナビゲーター)ことが、数値の減少に関係しているのかもしれない。

表2:6つの指標の変化(全回・全時間帯)

年月日 [曜日]	WS 回	時間帯 初:0-5分 中:25-30分 末:50-55分*1	壁から 離れる (%)	職員から 離れる (%)	ナビゲーターに 目を向ける(%)	ナビゲーターに 話しかける(%)	ナビゲーターに 体を用いて 表現をする(%)	全体活動への 参加(%) ^{*2}
2019年 10月11日[金]	WS1	初	93	97	37	0	0	
		中	72	97	29	0	0	68
		末	80	91	47	0	0	
10月19日[土]	WS2	初	82	98	13	0	1	81
		中	90	94	20	0	0	98
		末	94	96	20	3	1	98
11月2日[土]	WS3	初	91	99	41	2	1	100
		中	58	98	18	0	0	100
		末	88	97	6	0	4	100
11月9日[土]	WS4	初	87	89	14	1	4	83
		中	31	79	34	0	0	
		末	95	97	9	2	9	95
12月14日[土]	WS5	初	76	85	34	0	4	78
		中	61	92	30	0	0	69
		末	69	91	18	2	4	51
12月20日[金]	WS6	初	87	88	12	1	3	86
		中	50	100	36	2	1	100
		末	84	95	16	0	2	
2020年 1月17日[金]	WS7	初	79	92	14	0	0	83
		中	89	85	20	0	1	92
		末	99	91	20	1	0	84
1月18日[土]	WS8	初	86	100	12	0	0	97
		中	100	100	1	1	0	100
		末	100	100	30	0	0	97
2月8日[土]	WS9	初	91	87	15	0	0	100
		中	98	90	16	0	0	94
		末	64	87	11	0	0	50
2月14日[金]	WS10	初						
		中						
		末						

*1:「時間帯」の項目で「末」が欠けている場合、映像がないことを示す。

*2:「全体活動への参加」の項目で空欄となっている時間帯は、当該の5分間に全体活動が行われなかったことを示す。また、この項目に示す数値は、当該の5分間に全員参加の形式で行われた活動をとらえた映像(静止画)に撮影された対象者(子ども)の延べ人数に占める、その活動への積極的参加者の延べ人数の割合(百分率)を示す。

(二)各回における第2指標「職員から離れる」の変化(短期的変化)
ワークショップに参加している子どもたちのごく一部(1-3名)は、ワークショップの経験回数とは関係なく、ときおり施設職員にしがみつ、施設職員の膝の上に座るなどの行動を示していた。しかし、グラフに示す通り、それ以外の9割ほどの子どもたちは、活動に参加しているかいないかにかかわらず、一貫して「施設職員から離れた」状態にあった。なお、全般的傾向とは言えないが、第4回、6回、7回、8回の最初の5分間から半ばの5分間にかけての数値の変化からは、壁から離れることはできるものの、未だ自分一人で活動に参加できるほどでもなく、そのため施設職員にしがみつ形で活動に参加している様子が窺われる。実際このことは、静止画及び動画によっても確認できる。また、こうした行動特徴は、ナビゲーターによっても捉えられている。実際、インタビュー資料には次のような記述がある。

「Gちゃんは圧倒されて、動けなくなった。自信がなくて、誰かにひっついてる」(第6回目:施設職員X)。

(三)各回における第3指標「ナビゲーターに視線を向ける」の変化(短期的変化)

第3指標は、ナビゲーターの理解とは異なり、全般を通じて必ずしも子どもたちの自己肯定感の向上を表現するものとは言えないようである。というのも、創作ダンスの場合、説明のシーンを除き、必ずしもナビゲーターがお手本を示すわけではなく、あるいは、他

の参加者のダンスが手本となることもあるため、ダンスが始まると視線がナビゲーターからはずれることが多々あるからである。他方、映像を分析すると、とくに第3、4、5回の半ば5分間から最後の5分間にかけて、第1指標の数値が減少(=壁にもたれる行動が増加)するとともに第3指標の「ナビゲーターに視線を向ける」傾向が高まるという興味深い関係が明らかになる。ただし、この関係は、一部の参加者について見られるものにすぎない。この第1指標と第3指標の関係は、インタビューデータを参照することによっても裏付けることができる。

「Rくんは徐々に能動的に関わりたと思っているのかな?と思った。興味関心は強い」(Rくんはよく見てくれている)(第5回目:神前)。

こうした発言は、体では未だ参加できなくともすでに視線で参加している、というアンビバレントな子どもたちの状態を捉えたものかもしれない。

(四)各回における第4指標「ナビゲーターに自ら話しかける」の変化(短期的変化)

第4指標は、分析対象となった3つの時間帯ではほとんど捉えられていない。とはいえ、とくにワークショップ第3-6回目の半ば5分間には、第3回目半ば5分間の3%が最高値として、第4指標の僅かな増加が見られる。ナビゲーターや施設職員たちは子どもたちの行動のこうした小さな変化を見逃してはいない。必ずしも

図1-1:6つの指標の変化(前半5回・3つの時間帯)

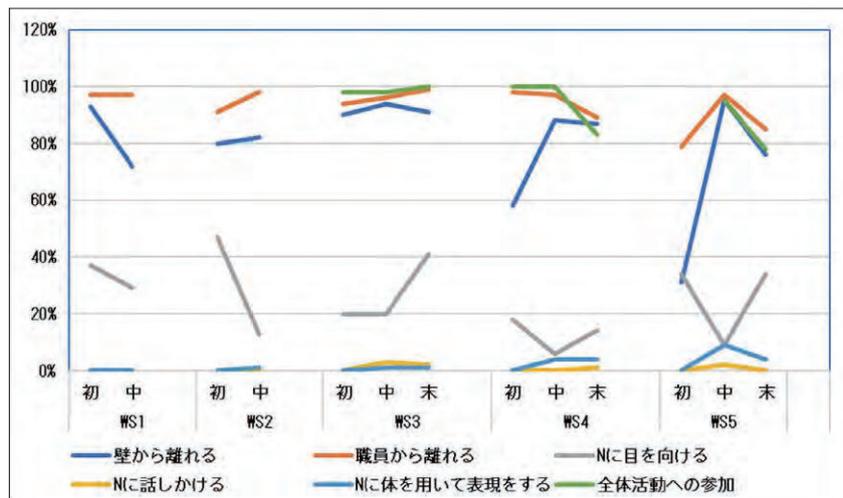
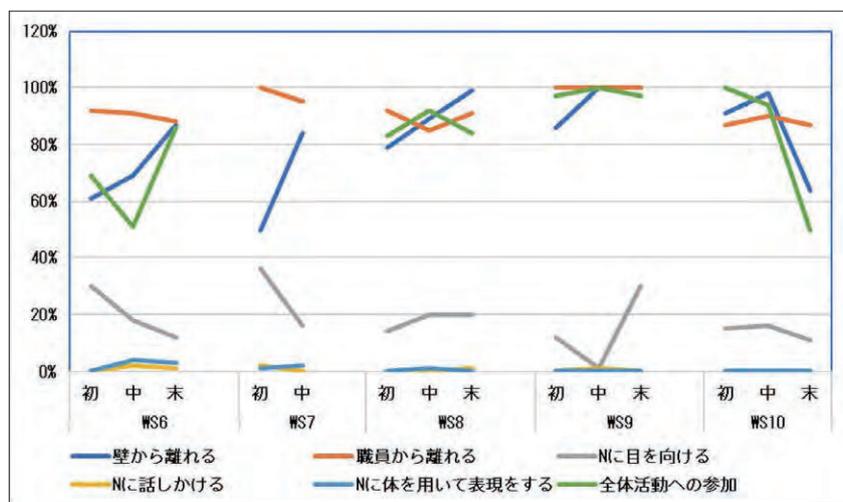


図1-2:6つの指標の変化(後半5回・3つの時間帯)



ワークショップ半ば5分間のみに関連するものではないが、インタビューデータにも次のような記述がある。

「Oくんがワークショップの前に、「ストップ&ゴー」をやりたいと言ってきた」(第3回目:ナビゲーター)。

「Rくんは、チェッコリの歌詞のことを聞きにきたり、掛け声もアイデアがいっぱいですごい」(第4回目:ナビゲーター隅地)。

「ラストに何をするかリクエストを聞いてみたら、「4回転」や「ブリッジ」と言う声があり、みんなでトライした」(第4回目:ナビゲーター)。

「Sちゃんが、「カラダ伝言ゲーム」で男子だけやった後に、両チームで一斉にやろうとしたら、「女子は?」と抗議してきた」(第4回目:ナビゲーター隅地)。

「その動く姿がかっこよかったので、見せ合いっこしてはどうかと

提案してみたら、「やりたい!」「いやだ」とはっきり伝えてくれたので、……」(第5回目:ナビゲーター)。

「ちゃんが、すぐに挨拶にきてくれて「土曜日は楽しかった、今日も楽しみ」と言ってくれたのが嬉しかった」(第6回目:ナビゲーター鈴村)。

数値データには表れていないが、インタビューデータでは、最終回の第10回目についても第4指標について語られている。

「Hくんと今日は近づけた。彼が興味のあること、前は「高く足をあげるには」みたいなことを聞いてきたし、今日は鉛筆の話(ペン回し)になって、色々あるけど、興味のあることはずっとこだわってて、それが良いふうに関係性を作るきっかけになった。……思いの外、Sちゃんが「もう卒業やし」と言ってくれて、寂しいのかなと思った」(第10回目:ナビゲーター阿比留)。

「最後に感想を聞いていったとき、耳を寄せて行ったら、ちゃんとその子の言葉で言ってくれたり、「もっと激しい(運動量が多い)のがやりたい」などリクエストがもらえて嬉しい」(第10回:ナビゲーター隅地)。

(五)各回における第5指標「ナビゲーターに対して独自の身体表現をして見せる」の変化(短期的変化)

第5指標も、数値データ上ではほとんど捉えられていない(第5回目最後の5分間の9%が最高値)。他方、インタビューデータは、ナビゲーターや施設職員が子どもたちのこうした行動をとらえていたことを示している。なお、以下の記述がいずれの時間帯に由来するものかは不明である。

「ワークショップの後、よさこいを見せてくれた。とても嬉しかった。Sちゃん・Oくんは5年くらいやっているとのこと。自分が頑張っていることを、私たちに見せてくれた」(第3回目:ナビゲーター)。

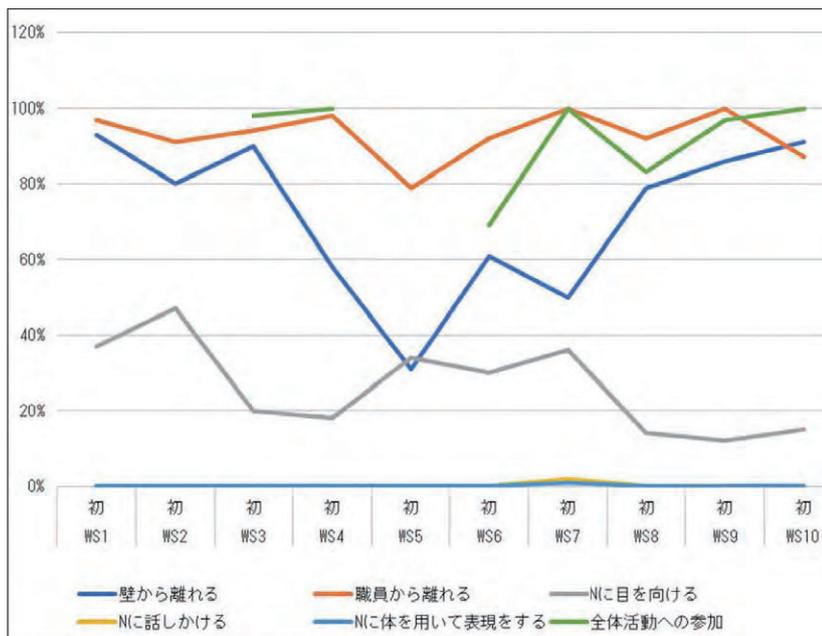
「はじめにやった時に、Oくんが倒れたポーズをしたので、「さっきやったやつを取り入れよう」とあびちゃんが早速採用。ストップの時にみんな倒れる。次にスポーツシリーズで野球、サッカー、空手、バスケット、ラグビー、フィギュアのポーズをする。フィギュアはそのものの動きで動いている子もいた」(第4回目:ナビゲーターあるいは施設職員)。

「また前の子と違う、自分のオリジナルポーズをする子も多かった」(第4回目:ナビゲーターあるいは施設職員)。

表3:6つの指標の変化(全回・00-05分)

月日	曜日	WS回	時間帯(分)	M1壁から離れる	M2職員から離れる(%)	M3Fに目を向ける(%)	M4Fに話しかける(%)	M5Fに体を用いて表現をする(%)	全体活動への参加(%)
10月11日	金	WS1	初	93%	97%	37%	0%	0%	
10月19日	土	WS2	初	80%	91%	47%	0%	0%	
11月2日	土	WS3	初	90%	94%	20%	0%	0%	98%
11月9日	土	WS4	初	58%	98%	18%	0%	0%	100%
12月14日	土	WS5	初	31%	79%	34%	0%	0%	
12月20日	金	WS6	初	61%	92%	30%	0%	0%	69%
1月17日	金	WS7	初	50%	100%	36%	2%	1%	100%
1月18日	土	WS8	初	79%	92%	14%	0%	0%	83%
2月8日	土	WS9	初	86%	100%	12%	0%	0%	97%
2月14日	金	WS10	初	91%	87%	15%	0%	0%	100%

図2:6つの指標の変化(全回・00-05分)



これらのインタビュー記録からは、たとえ分析対象となった時間帯の映像が第5指標の顕著な増加を捉えていなくとも、また、たとえ長期的・連続的な変化とは言えないとしても、一部の子どもたちの間に創造的・独創的な身体表現が散発的に現れていたことがわかる。

ちなみに、ナビゲーターや職員の言葉に現れてはいないが、映像で確認できる変化もある。とくに、第4回目半ばの5分間(休憩中)には、まず一人の子どもがナビゲーターに自ら話しかけ、それに続いて身体表現を行った。これに呼応してもう一人、さらに続いてもう一人が身体表現を行った。一部の子どもたちによるごく短時間の出来事であったため数値データとしては4%にしかならなかったが、この変化も子どもたちが自分自身のよさに気づきこれを表現しようとする傾向の現れとして看過できない。

「2人でやるだけでなく、大勢でスクラムを組むポーズも出てきた。……Aくんが、側転のような動きで転がったので、それも採用してやってみる」(第6回目:ナビゲーターあるいは施設職員)。

「Sちゃんがバイバイの動きをしたので、それも採用した」(第6回目:ナビゲーター)。

さらに、インタビューデータを参照すると、この第5指標もしくはこれに近い行動が、必ずしもナビゲーターを観客としない形で、あるいは、他の子どもを介して間接的に表現されていることがわかる。

「Rくんがフィギュアジャンプをさらっとやっていた。あびちゃんが「もう1回やって」とリクエストしたが、やってくれなかった」(第4回目:ナビゲーターあるいは施設職員)。

「Rくんはアイデアマン。自分ではやらないが、みんなにやらせる」(第4回目:施設職員U)。

(2) 開始後5分間の6つの指標の長期的変化

ワークショップ半ば5分から最後5分にかけての指標の変化はそれぞれの回で行われたワークショップの内容から影響を受けるため、個々の指標の出現を示す数値を複数の回に渡って継続的に比較しても意味がないだろう。そうした理由から、本調査では、平常時のデータを重視する血圧測定をヒントに(異なる日に測定された運動後の血圧を相互に比較しても血圧の長期的な変動について述べることはできない)、ワークショップ開始直後の5分間のデータを最重要視した。このデータの推移は、このダンスワークショップの自己肯定感向上効果の持続性を示唆するものと考えられる。

ワークショップ開始直後の5分間における6つの指標の経時的変化は(表3)に示す通りである。

これをグラフで示すと(図2)のようになる。なお、この図でも、ワークショップ間の時間的隔たりの大小は表現されていない。また、第6指標については、データが欠けている第1回目、第2回目、第5回目を表示していない。

このグラフが示す通り、とくにワークショップ第5回目あるいは第6回目以降、第1指標と第6指標の数値がかなり増加していることがわかる。確かに、子どもたちの創造的・独創的行動を示す第4指標と第5指標に顕著な増加が見られないにもかかわらず、全員でダンスを行う行動を捉えた第6指標については徐々に、しかもかなり明確なかたちで、多くの子どもたちが参加するに至ったことがわかる(第10回目については100%)。このことから、創作ダンスを特徴づける創造性・独創性の表現にまでは至らずとも、ナビゲーターや他の参加者が示した手本の模倣の要素を含む参加者全員でのダンスであれば主体的に参加しようとする姿勢が増加していると見ることができる。なお、とくに第5回目の値の大きな落ち込みは、第4回目からの時間的隔たりの大きさ(1か月以上)に関連している可能性がある。

3. 調査結果のまとめ

本調査では、エスノメトリー法による映像分析データとともにナビゲーターや施設職員へのインタビューデータを用いて、創造的なダンスが児童の自己肯定感向上に対する創造的なダンスの効果を検証してきた。

検証の結果以下のような諸点が明らかになった。

まず、各回ごとの時間帯による短期的・継続的变化について言えば、ナビゲーターによって挙げられた自己肯定感指標のうち、第1指標「部屋の壁から離れる」については、とくに各回の最初の5分間から半ばの5分間にかけて、概ねダンスワークショップの効果を示していると言える。第2指標「施設職員から離れる」については、特定の児童に限られる現象であるという限定、また、継続的变化としての特徴を示さないという限定はあるが、第1指標との逆相関関係(施設職員に密着した形でダンスに加わる)を示す部分があることが示唆された。第3指標「ナビゲーターに視線を向ける」については、特に創造的ダンスの場合、自己肯定感の向上を示す指標としては妥当性が低いことが示唆された。ただし、一般化できるものではないが、第1指標との間に逆相関関係(体によってではなく視線によってダンスに加わる)が見られる部分があることが示された。第4指標「ナビゲーターに自ら話しかける」及び第5指標「ナビゲーターに対して独自の身体表現をして見せる」については、総じて出現頻度が低いため、映像として捉えることは困難(数値化困難)だが、ナビゲーターや施設職員による事後の反省を記録したインタビューデータによって、散発的ではあるものの多様な形で児童によって表現されていたことが明らかになった。

次いで、ワークショップ開始後5分間の長期的・継続的变化を示すデータからは、長期のインターバルを挟んだ第5回目あるいは第6回目以降、第1指標と調査者が参考として付加した第6指標のかなり顕著な増加が明らかになる。他方で、第5指標は同じワークショップ後半の時期においても数値データとしては顕著な増加を示していないことから、創造的・独創的な身体表現としてではなくとも、ナビゲーターあるいは他の参加者が示した手本

の模倣の要素を多分に含む参加者全員によるダンスの中で子どもたちの自己肯定感の向上が表現される可能性が示唆される。

4. 補足説明

最後に、ワークショップ全体で子どもたちによって示された6つの行動指標の変化をもとに、創作ダンスと子どもたちの自己肯定感の関係について補足説明を加えておきたい。

まず第1に、ナビゲーターによって挙げられた5つの指標のうち、第3指標「ナビゲーターに目を向ける」は、必ずしもダンスのお手本をナビゲーターが提示せず子どもたち自身の発案による所作を重ねる創作ダンスの性格上、話し合いや説明のシーンでは子どもたちの自己肯定感の表現となりえていても、ダンスの最中では自己肯定感指標としての意味を失うと考えられる。

第2に、このワークショップへの参加は子どもたち自身の意志によるものである。そのため、子どもたちの発言や行動の自発性に関わる第4指標「ナビゲーターに自ら話しかける」や第5の指標「ナビゲーターに対して独自の身体表現をして見せる」が現れず、単にナビゲーターからの問いに答えたりナビゲーターや他の子どもの身振りを模倣しただけであっても、そこにすでに子どもたちの自発性が表現されていると見なすこともできるのかもしれない。

第3に、これと同じ理由によって、指標5「ナビゲーターに体を用いて表現をする」と調査者が付け加えた指標6「全体活動への参加」を区別することも難しくなる。というのも、ワークショップへの参加自体が自発性の表れであるとするならば、そこでどのようなダンスが行われたにしても、基本的にそれは自発的な表現と見なされるからである。さらに、ダンスがナビゲーターだけでなく他の子どもたちや自分自身をも観客として行われると考えるならば、第5指標のように観客をナビゲーターに限定する必要はなく、むしろ単に全員で行うダンスに積極的に加わるという行動(第6指標)を自己肯定感の表現と見なしてもよいのかもしれない。データの上では、ナビゲーターに向かって独自の身体表現を行うというシーンは、ごく限られた子どもたちによるごく短時間の出来事としてしか現れない(10%以下)。それは、この自己肯定感指標が高すぎるハードルだからなのかもしれない。

第4に、言うまでもないことであるが、個々の映像の分析やナビゲーターや施設職員による観察によって捉えられる個々の子どもたちにおける小さな変化(それは個々の子どもにとっては大きな変化かもしれない)は、子どもたち全体における変化を示す数値データの中でかき消されてしまうということである。よって、本調査報告書で提示したエスノメトリー法によるデータは、あくまでも子どもたちの全体的印象の経時的変化を示すにすぎないということを含めて強調しておかなければならない。

最後に、子どもたちの自己肯定感の表現の変化が、少なからず教育に関心を持つ者が想定しがちな線形的軌跡(例えば「右肩上がりに徐々によくなる」)を辿らず、むしろ一進一退的性格を示すということについて述べておかなければならない。このことは数値

データからもナビゲーター及び施設職員へのインタビューの内容からも裏づけることができる。図1-1と図1-2が示す各時間帯及び各回における指標の変化から、何らかの一般化可能な法則性を見て取ることは困難であろう。また、図2が示す第4回目から第7回目にかけての第1指標及び第2指標の落ち込みや、どの指標にも見られるジグザグの推移などからは、自己肯定感の向上に対するダンスの効果が、短期的に見ても長期的に見ても一進一退の性格を示すことがわかるだろう。

インタビューデータによれば、その要因の一つとして曜日の影響が挙げられるだろう。インタビューデータには次のような記述がある。

「土曜日と全然違う雰囲気だった。平日だったからか、やっぱり学校帰りで疲れているのかな。土曜日は落ち着いている」(第6回目:全員)。

「土曜日と比べて賑やかだったからよかった反面、ヒートアップするのが申し訳なかったかな」(第6回目:施設職員V)。

「土曜日はやっぱりおやすみモード。金曜は学校から帰って、宿題して、ダンス。と慌ただしい」(第6回目:施設職員X)。

「昨日に比べると穏やかで落ち着いてた。曜日が変わるだけで、こんなに変わるものか。……金曜は学校行って、帰ってくる。低学年は学校の後、児童館に行って、帰ってくる。児童館も騒がしいところなので、そのままの雰囲気を持って帰ってくる。今日は10時半くらいから勉強して、遊んで、とゆっくりした時間の中でダンスに取り組む。昨日より落ち着いていた」(第8回目:施設職員V)。

第2の要因として考えられるのは、とくに小学校高学年の児童に見られる年齢期特有のアンビバレントな言語的・身体的表現である。数値データの上では、上述の第1指標と第3指標の関係(壁にもたれてはいるが目で参加している)や第1指標と第2指標の関係(施設職員にしがみつきたちで集団での活動に参加する)がこの種のアンビバレンスの現れと見なされるだろう。インタビューデータにも次のような記録がある。

「子どもたちの反応は予想通りだった。初対面の人に対してはシャイである。でもとても興味を持っていたようだった」(第1回:施設職員U)。

「恥ずかしがり屋の子どもたちが多いが、途中から興味があるなあとということがわかった」(第1回:施設職員W)。

「壁に行ってみて、参加するように促してみたら、少し嫌そうにするけど、動いてくれた。自分で率先していくのはハードルが高いが、本当に嫌ではない」(第4回目:ナビゲーター隅地)。

「Sちゃんと呼ばれるのは、恥ずかしい。入るのも恥ずかしいけど、

入ったらいい感じ」(第4回目:施設職員U)。

「普段しない壁のぼりは男の子にとって嬉しいかな。「できへんし」って言うけどやってみたいんだと思うし、そういう心を持っているのがいいな」(第6回目:ナビゲーター阿比留)。

「今日部屋に入ったらびっくりしたけど、男の子一人ひとり興味があることをすごく聞いてくる。身体の使い方とか。なのに全員集まるとシュンと弱くなる。一斉にやろうとすると構えてしまうのかな」(第7回目:ナビゲーター阿比留)。

「手を繋ぐのは苦手な子が多いかなと思うけど、みんなで手を繋いだ時に、PくんとRくんはすぐ繋いだけど、Oくんは嫌がってた。Rくんが花沙と手を繋いだ時に「僕、頑張ってるねん、だから頑張れや」とOくんに言っていた場面があった」(第8回目:ナビゲーター花沙)。

「なんとなく、思春期の子たちって指示されるのを嫌がるよね。自分がどうしたいってことを感じてもらおうのが大事なのかな」(第8回目:ナビゲーター塩見)。

さらに第3の要因として、子どもたち同士の人間関係が挙げられるだろう。これに関連するものとして、インタビューデータには次のような記述がある。

「今日はRくんがいなかったの、Oくんのびのびできたのかな。子どもたち同士の関係性も影響するよね。子ども同士でも、相手によって気を遣っている」(第3回目:施設職員)。

「RくんがいないとOくん、Pくんはいい感じなのだが、Rくんがいるとちょっと・・という感じになってしまう」(第9回目:施設職員V)。

付言すれば、ワークショップ外部での出来事や個々の子どもの心理状態からの影響があることは言うまでもないだろう。とくに1か月以上の時間的隔たりのある第5回目については、要因を特定すること自体が難しい。インタビューデータでも、これに関連すると思われる記述がある。

「僕はAくん担当の職員で、土曜はがっつり関われる日。それはAくんも分かっている。でもなんであんなに今日はくっついてきたのかな?」(第5回目:施設職員V)。

5. 本調査の意義と課題

自己肯定感の定義は必ずしも一義的ではないが、「一目を気にせず自分のよさを認識している」「大勢の前で自分を表現できる」などの指標は多くの定義に含まれている。今回の調査でナビゲーターによって挙げられた5つの行動指標もこうした一般的定義と大きく食い違うものではない。例えば、部屋の壁にもたれてダンスの輪に加われないの是一目を気にして自己表現に躊躇している状態の現れであり、職員に抱きついた状態でダンスに加わるのも、一目を気にしないでいられるほどには自分自身の価値を十分に認識できていない状態の表現と見なすことができるだろう。本プロジェクトの調査結果からは、一部の行動指標の変化が示すように、とくにワークショップの中盤以降そうした自己肯定感の低い状態が改善されていったことが明らかになる。

しかし、おそらく、このワークショップを直接観察していない人であれば、「なぜ壁から離れることが自己肯定感の現れと見なせるのか」といった疑問を抱くだろう。というのも、本調査で用いた行動指標は、このナビゲーターが、この施設の子どもたちを対象に、施設内のこの部屋で、暮れ・正月を挟んだこの時期に行った創作ダンスワークショップに対してしか意味を持たない特殊なものであり、しかも、それらは、このナビゲーターの経験知から導き出された主観的なものにすぎないからである。その意味では、本調査の結果は一般性をもたない。

むしろ、多様な実践に対してユニバーサルに適用できる自己肯定感指標を用いて調査を行えば、ダンスワークショップが自己肯定感の向上に対して有する効果について、より説得力のある説明が可能だろうし、(ある程度までは)種類の異なる活動との効果比較も可能になるだろう。しかし、そうした一般的な指標は、個々の実践や実践家や対象者や実施場所が持つ特性を捨象することによって得られた、あくまでも平均的なものにすぎない。また、仮に本来自己肯定感の向上の平均値的表現でしかない一般的な行動特徴の生産が、他の実践と成果を競い合う形で目指されることになれば、個々の実践から徐々に彩り豊かな特性が失われていくだろう。そうした本末転倒の事態の果て出現するのは、スポーツであれダンスであれ合唱であれ、例えば張り付いた笑顔で一斉に微笑み、あるいは相手構わず正面から目を見据えて自発的に話しかけるような、実に奇妙な光景であろう。

それに対して本調査では、「子どもたちのどのような行動をもって自己肯定感の表現とみなすか」という問いに対して実践家が自らの経験値を踏まえて答えた「主観的」な印象を最大限に重視した。一般には、そうした行動指標に対しては「たかが主観」といった評価が下されるだろう。「されど主観」である。というのも、「主観的」行動指標に着目することで、その時、その場で、その対象に対してのみ行われた一期一会の実践においてしか現れなかった成果を捨象することなく汲み取ることができるからである(喩えて言うならば、子どもが遠足で食べたおにぎりの美味しさをサラリーマンが仕事帰りに食べた焼き鳥の美味しさと比較することなどではできない。いずれもそれぞれに美味しいのである)。その点では、本調査が目指すところはインタビューなどによる質的調査に近いと言える。にも

かわらず、本調査では、調査対象に現れた質を数値で表現した。それは、通常の計量的調査の客観性を目指したからではなく、ましてや異なる実践間の競争を煽るためでもなく、むしろ「たかが主観」として過小評価されかねない価値が、少なくともその場に居合わせた観察者の間で「間主観的」に共有可能であることを示すためであった。一部の行動指標にとどまっているとはいえ、そうした主張は、本調査によって部分的にはあれ裏づけられたのではないだろうか。よって、実践から調査に及ぶ本プロジェクトをモデルケースとする場合にも、指標の安易な一般化を避け実践家の主観的印象を最重要視するという特徴は保持してよいし、また保持すべきだろう。

ただし本調査には今後改善を図るべき課題がある。第一に、実践家によって挙げられた第3指標は、確かに実践家本人にとって重要な行動指標だったはずだが、しかしすべての子どもにすべてのシーンで当てはまるものではなく、実践家の指向性の産物であった可能性がある。すなわち、特定の子ども、特定のシーンでのみ持つその重要性を、その重みゆえに実践全体に拡張してしまったということである。この問題を解決するためには、実践家へのインタビューにおける問い方を厳密化し、〈実践全般について当てはまる〉自己肯定感指標を挙げてもらうことが必要だろう。第二に、第4及び第5指標の出現を捉え逃すことがないよう、ワークショップ開始前の数分間と終了後の数分間を含めて動画撮影しておくことも必要だろう。第三に、言うまでもないことだが、条件が許す限り、測定者を複数化し静止画の感覚をより短くするなどの方法によって、データの客観性・厳密性を高めていくことも必要であろう。

インタビュー

以下、全ての記録は

鈴木英理子(アシスタント/コーディネーター)が担当

【第1回目】

2019年10月11日 17:00-18:00

母子生活支援施設Aダンスワークショップ

ナビゲーター:

セレノグラフィカ 隅地菜歩・阿比留修一
(まほさん・あびちゃん)

アシスタント:

花沙(はなさ)、鈴木英理子(えりんぎ)

コーディネーター:

神前

見学者:

山本亮太郎さん(京都市)

施設職員:

Uさん、Vさん、Wさん、Xさん

参加者:

Bくん、Dくん、Eくん、Gちゃん、Oくん、
Lちゃん、Pくん、Rくん、Sちゃん
早退……Hくん 途中退室……Iちゃん
学童帰りから参加……Aくん、Fちゃん

WS概要

テーマ:初めての出会い、仲良くなろう、よろしくね
5分くらい前に子どもたちが続々と入室。隅っこの方に寄って座っている。中にはカーテンの中に隠れている子も。時間になり、U(職員)さんからご挨拶、そして神前さんがご挨拶。そしてナビゲーター、アシスタントの自己紹介。出身県や育った県、今住んでいる県を紹介した。セレノさんの「ウェルカムダンス」を披露するため、子どもたちに前に来るように誘導。誘導しているうちに、あびちゃんが「何年生?」など子どもたちに声をかけ、身体に触れたり、自然に踊り出したりする。子どもたちはキャーキャー言いながら逃げたり、隠れたりして反応していた。そしてまほさんも踊り出す。そして2人の掛け合いでは笑い声や、「ちょよちょよして!」などリクエストの声が入る。次に花沙さんとエリンギが自己紹介ダンスをした。「day dream believer」のゆったりとした曲の雰囲気もあり、子どもたちの反応も変わり、しっかり見てくれていた。そして、みんなで輪になるように声かけし、まほさん、あびちゃんがみんなの名前を聞いていった。突然のダンスに驚いて怖くて泣いてしまったIちゃんが、X(職員)さんとSちゃんと退室。

みんなて手を繋いで輪になる。まほさんが「パン

パンエイト」の動きを伝えていく。テンポが早くなっていくのを、みんな面白がってやっていた。1のグループと2のグループに分かれる声出しの時、恥ずかしがって「ワン!」とか「9!」と言う子がいた。手を繋ぎたくない子に対しては、まほさんが「繋がないでもいいからね」と声かけ。そして「キラキラ星」の曲に合わせて踊ってみた。壁にもたれて見ている男子たちや、V(職員)さんはずっとくっついている男子たち。女の子は一緒に楽しんでた。

ストップ&ゴー:走って、ぶつかりそうになったら避ける。あびちゃんが「ストップ!」と言ったら、その状態のまま止まる。顔もそのまま。そして「片手をあげて止まる」。止まったポーズをあびちゃんが「かっこええやんか〜」と伝える。次に「片足あげて止まる」「両足あげてストップ」と展開していく。次に音楽をかけて、音楽が止まったらストップする。音量が小さかったので、ちょっと聞こえにくかった。途中、PくんがBくんを取り押さえた反動で、Bくんが後ろに倒れ、頭をぶつけてしまっていた。幸いすぐに元気に動いていた。そのあとすぐに、Eくんが泣き出した(何が原因で泣き出したかは、映像を見ても判断できない)。

振りダンス:振りと共に「おとつと〜」や「まんにゃかまんにゃかまんにゃか〜」「ジャンプージャンプー」と言う面白いかけ声があり、子どもたちも面白がってやっていた。踊らなくても、かけ声だけで参加する子もいた。踊り終わったあと、Gちゃんが「もう一回おどりたい」とリクエストしてくれ、もう一回踊った。

クールダウン:床に寝転がって3分くらい休んで、ワークショップ終了。

最後に子どもたちにアンケートを書いてもらう。

振り返り

職員さん、山本さんを交えて1時間ほど振り返りをする。子どもたちの様子をどう思ったか、感想を伺った。

U(職員):子どもたちの反応は予想通りだった。初対面の人に対してはシャイである。でもとても興味を持っていたようだった。セレノさんの、無理強くない声かけがよかった。次回がまた楽しみ。職員があと3人いて、参加している職員によって、子どもたちの態度が変わる。

W(職員):恥ずかしがり屋の子どもたちが多いが、途中から興味があるなあ、ということがわかった。スポーツが好きな子が多いので、取り入れてみたら楽しいかも。卓球をやっている子がいる。子どもたちは走ることが好き。しかし、普段の活動では部屋で走ることはない。ケガを

しないように注意している。

V(職員):びっくりするくらい子どもたちが緊張していた。「ウェルカムダンス」の3曲目(フランス語)をRくんがよく見ていた。Pくんは年下の面倒見が良いので、低学年とペアになってやる時間があるといいかも。Hくんは「参加しない」と言っていたのに参加していた。EくんとHくんは、いつもくっついている。仲よし。

山本:初めの、あびさんの自然な入り方がよかった。これから先どんな風に変化していくのか楽しみ。(セレノさんに)今日想定していたゴールはどのくらい達成したか?

隅地:今日は「これからどんな人たちが一緒にやるのかを感じてもらいたい。私たちも、どんな子どもたちがいるのか感じたい」というテーマで行った。そのテーマに対しては100%越え。子どもたちがとても温かかった。本当の拒否は身体に出るが、それがなかった。みんなとても好奇心旺盛。嘘のない感じがかった。

阿比留:一人ひとりと対話していける感じがかった。自分の話をしてくれる子がいたりした。みんなが愛おしいなあと思った。きつと日常の中で職員さんたちの温かさに触れているんだと思う。

鈴木:「ストップ&ゴー」の時に、頭を打ったり、泣いている子がいた。そういう事態が起こった場合の対応について、事前に打ち合わせができていなかったなと思った(今後は職員さんがケアに入るので大丈夫ですと確認できた)。

花沙:発達に課題がある子の場合、見通しが立たないと活動に入りにくい子もいれば、スッと入れる子がいたりする。気持ちとしては楽しいと思っている。それぞれのペースで参加できる状況が良かった。部分的に参加してもOKなんだなと思った。

神前:Bくん……手が出やすいのが気になった。でも踊り出したら、とても自由。発現力が豊かな子は、次の展開を読んで、やるのが早い。「クールダウン」では寝ていたのがびっくりした。きつと自分の中で安心できたんだろうなと思った。Lちゃん、Gちゃん……すぐにワークに入り、最後まで活動していた。エースの予感あり。表現することが好きなんだなあと思った。「ストップ&ゴー」では、みんなが開放されていた。

【第2回目】

(コーディネーター立合いが出来なかったため、記録なし)

【第3回目】

2019年11月2日 14:00-15:00

施設A ダンスワークショップ

ナビゲーター:

セレノグラフィカ 隅地菜歩・阿比留修一

(まほさん・あびちゃん)

アシスタント・コーディネーター:

鈴木英理子(えりんぎ)

施設職員:

Vさん、Wさん、Xさん

実習生:

Yさん・Zさん

参加者:

Bくん、Aくん、Fちゃん、
Cちゃん、Oくん、Lちゃん、Sちゃん

前回のWSより

子どもたちが一人ひとり自己紹介をするのは若干抵抗があるような感じなので、今回は無しにしてワークを始めてみる。いろんな年の子にフィットする内容をいろいろやってみる。スポーツ選手など、プロがやっているということに興味を持つようなので、ストレッチの動きを取り入れ、「オリンピック選手やアスリートもやっているよ」という声かけをしてみる。

WS概要

あいさつ:「私の名前覚えてますか」と問いかけると、「ちょんまげ!」と言ったり、すぐ「まほ!」「えりんぎ!」など答えてくれた。

「ボールパス」:ボールをパスする相手の名前を言ってパスをする。小さな声でも名前を言うFちゃん、Bくん、Lちゃん、Cちゃんはしっかり名前を言ってパスしていた。Sちゃん、Oくんはバレーのアタックで相手にパスをするなど、乱暴な感じに。Aくんも同じような感じに。だんだんヒートアップしてきて、職員さんに対しての攻撃になりそうだったので、切り替えて、座ってボール転がすパスに変更。ポーリングのように、相手を的にして転がすようにガイドしていく。この時は落ち着いてみんな取り組めた。

スーパーストレッチ:座ったまま、股関節を柔らかくするストレッチ。足の裏を合わせて、ゆらゆら揺れる。「足の付け根を柔らかくすると、転ばない・怪我しない・足だるくならない」と伝えるまほさん。そして、ゆらゆら揺れて、身体を転がすことにも挑戦。みんな果敢に挑戦していた。「頭の重さは体重の8%。重いから、頭から起き上がるんだよ」とまほさんのアドバイスもあって、だんだんみんな上手にできるようになっていった。

スーパートレーニング:四つん這いになって、右手と左足を同時にあげるポーズに挑戦。(逆も)一番難しい膝立ちポーズにも挑戦。ワイワイと

みんな楽しそうに取り組んでいた。

ストップ&ゴー:始めて早々、ポーズをしっかり決める子が。あびちゃんがまず、「ラグビーのタックルのポーズをしよう」と言う。そのあとはいろんなスポーツの名前を言い、連想するポーズを自由にポーズしてもらおう。最後は好きなスポーツのポーズしてもらった。

カラダ伝言ゲーム:一列に並んで、まずは言葉で伝言ゲームをする。Aくんは耳打ちされるのが苦手なようだった。1回目は「パンダが3回あくびした」が「パンダがこぼした」に。2回目は「麦茶はおいしいよ」が「久しぶりだ」に。正確に伝えることの難しさを実感。次は2列に分かれて、身体で挑戦。手拍子に合わせて、前の人のポーズを真似していく。途中で、Aくんが前の人と違う、自分のポーズをしだす。それに対して、Sちゃんが「いいよ!いいよ!Aいいよ!」と言ったり、Aくんの後に並んでいる人たちも、みんなAくんの真似をしていたのが、とてもよかった。それ以降ずっとAくんのポーズはオリジナルで変わらなかった。Oくんが先頭になった時「無理です」と言いながらも、自分なりのポーズをしていたり、Sちゃんが励ましていた。一巡したら、音楽をかけて早いテンポでやってみた。とてもよくまとまっていた。

カラダの早口言葉:前回にやった「チェックリ」の曲に合わせて踊る。振りをレクチャーしているときに、Cちゃんが転んでしまい、肘をぶつける。V(職員)さんがすぐ寄り添ってくれ、1回目のダンスは見学。そのあと落ち着き、2回目には復活。2回目は最速のスピードに挑戦。みんなよく動いていた。

クールダウン:寝ている子ども、職員さんたちの脚や腕を揺すってあげる。

振り返り

まほさん・あびちゃん・えりんぎ、職員のXさんを変えて30分ほど振り返りをする(ざっばらんな会話であったため、出された意見の内容のみを記載する)。

回を増すごとに、子どもたちが慣れてきて、楽しそうだった。今日は全員参加な感じがあってよかった。伝言ゲームが楽しかった。

ワークショップでは毎回新しいことを1つやるが、今までやってきたこともやるというスタイルでやってみたく思っている。子どもたちが前回やったことを結構覚えている。Oくんがワークショップの前に、「ストップ&ゴー」をやりたいと言ってきた。

SちゃんとOくんがとても仲良し(兄弟ではない)。終わってから、「アンケートを書きたい」という子

もいた。「ありがとう」と書きたいとのこと。Aくんが控え室に入ってきて、「お茶菓子どうぞ」と言ったりするなど、おもてなしの心がステキである。

Cちゃんが転んでしまったのが心配だったが、落ち着いてからまた活動に参加してくれたのでよかった。

Aくんがワークの内容をなかなか理解できないところを、みんながフォローしあっていた。Aくん自身は表現が好き。全力で表現しているのがよくわかる。

ワークショップの後、よさこいを見せてくれた。とても嬉しかった。Sちゃん・Oくんは5年くらいやっているとのこと。自分が頑張っていることを、私たちに見せてくれた。ちょっとずつ仲良くなれているのが嬉しい。

「ちょんまげ」と呼ばれるくらのフレンドリーさがいい。

今日はRくんがいなかったので、Oくんのびのびできたのかな。子どもたち同士の関係性も影響するよね。子ども同士でも、相手によって気を遣っている。

今日は子どもたちと目と目が合うことが多かった。小さい女の子たちはとても楽しんでいる。

Bくん、「卓球で1位になったことがある」ということを言ってくれた。

よさこいを見せてくれたので、ダンサーたちもみんなで何か発表してもいいね。

伝言ゲームがうまくいったのは珍しい。きっと普段、生活を共有しているからなんだと思う。

最後のクールダウンの時に、嫌がるかなと思ったけど、Sちゃんが身体を触らせてくれたことが嬉しかった。

[第4回目]

2019年11月9日 17:00-18:00

母子生活支援施設Aダンスワークショップ

ナビゲーター:

セレノグラフィカ

隅地菜歩・阿比留修一(まほさん・あびちゃん)

アシスタント:

花沙(はなさ)、鈴木英理子(えりんぎ)

コーディネーター:

鈴木英理子

施設職員:

Uさん、Wさん、Xさん

実習生:

Yさん・Zさん

参加者:

Bくん、Aくん、Dくん、Fちゃん、Eくん、Gちゃん、Hくん、Cちゃん、Pくん、Oくん、Rくん、Sちゃん

見学者:

Iちゃん

WS概要

まずはみんなで円になるように声かけをするが、男子たちが壁にくっついていたりして、はしゃいでいたりして、なかなかみんなで円になれない状況が続く。まほさんが一人ひとり名札を見て、名前を確認していく。なんとなく円になれたところで、「ボールパス」を始める。

ボールパス:今回は隣の人にボールをパスしていく。だんだんスピードを早めてみたり、反対回しをする。上からパスもしてみる。最後は片手で上からパスし、片手で受け取ることも挑戦。ボールを強くパスして相手が受け取れなかったり、すぐ落したり、叩き返す子もいた。みんなボールの行方はしっかり追っていた。

スーパーストレッチ:座ったまま、股関節を柔らかくするストレッチ。足の裏を合わせて、ゆらゆら揺れる。そして転がる。小さい子は挑戦していたが、ほとんどの子は見ていただけだった。

スーパートレーニング:バンザイをした立ちポーズから、8秒かけて床に寝る。そして8秒かけて、バンザイのポーズに戻る。男子たちは大声でカウントしながら一緒にやっていた。次に4秒、2秒と早めていく。最後に「アスリートたちは1秒でやるんだよ」と紹介して、みんな挑戦。

ストップ&ゴー:はじめにやった時に、Oくんが倒れたポーズをしたので、「さっきやったやつを取り入れよう」とあびちゃんが早速採用。ストップの時にみんな倒れる。次にスポーツシリーズで野球、サッカー、空手、バスケット、ラグビー、フィギュアのポーズをする。フィギュアはそのものの動きで動いている子もいた。

少し休憩。Rくんがフィギュアジャンプをさっさとやっていた。あびちゃんが「もう1回やって」とリクエストしたが、やってくれなかった。残念。

カラダ伝言ゲーム:まず2列に並ぶ。男子チームと女子チームに自然と分かれたが、男子チ

ームが並ぶことに苦戦。時間がかかった。並んだ後、前回の復習として男子チームが見本でやってみる。前回同様、Aくんのポーズは変わらず。そのポーズを自分の番がくるとマネする男子たち。また前の子と違う、自分のオリジナルポーズをする子も多かった。あびちゃんが「両チームやろう」と言ったら、Sちゃんが「女子は?」とつっこむ。「男子よりできるし」みたいなアクションに、まほさんも乗っかり、「ちょっとみときやー」と盛り立てる。そんな女子チームは見事に伝言ゲームを成功させた。見ている男子たちも掛け声で盛り立てて、終わるごとに「いえーい」大歓声だった。そんな掛け声は「なんでやねん」「さすがプロ」「やっぱプロ」「かっちょええ」「おなら」などと変化していった。最後にポーズを1つズレてポーズしていくことに挑戦。Aくんが掛け声担当で張り切っていた。1つズレポーズは、みんなかなり苦戦していた。次回以降の課題に。

カラダの早口言葉:前回にやった「チェッコリ」の曲に合わせて踊る。時間がなくて、速いスピードで踊る。男子たちはみんなで固まって踊らず、女子は踊っていた。

クールダウン:みんなが寝た時に電気を1つ消したら、子どもたちが騒ぎ出し、全ての電気を消し、さらに騒ぎ出す。電気が消せないように、えりんぎがスイッチのそばに立つ。まほさん、あびちゃんがみんなの身体を揺すっていくが、終始騒いでいる子が多かった。AくんはX(職員)さんやあびちゃん、まほさんの身体を揺すってくれた。

振り返り

隅地:大きい学年の男の子たちを誘っても、身体の拒否はなかった。それがすごく温かかった。温かさの深さを渡してもらった。Oくんの感じは前回と違っていた。Rくんは、チェッコリの歌詞のことを聞きにきたり、掛け声もアイデアがいっぱいすごい。ちょっとずつ受け入れてくれたところかな。

U(職員):初回見て以来で久しぶりに立ち会った。みんなちょっと慣れたなと思った。歌っていたり、「これ知らんの〜?」と言われたり、やったことを教えてくれたりした。端に寄っている男の子たちの雰囲気も変わった。Rくんは司令塔だが、悪い感じではない。いい方向に行けそうだなと思った。

神前:U(職員)さんにまったく同じ。あまりのエネルギーの解放に、いい意味で唖然とした。Rくんを注意してみていたが、最後にバイバイしてくれた。なんだかんだで積極的に参加してくれたなあと。

U(職員):彼自身がやったことに気づいてもらって、いいねと受け入れてもらえていることが大きい。

隅地:壁に行ってみて、参加するように促してみたら、少し嫌そうにするけど、動いてくれた。自分で率先していくのはハードルが高いが、本当に嫌ではない。

U(職員):Rくんはアイデアマン。自分ではやらないが、みんなにやらせる。

隅地:Rくんのアイデアを取り入れたショーイングをできたらしいな。

U(職員):Aくん、あんなこと(はちめちやに動いたり、大声出したり)をしても褒めてもらえる。テンションが上がって興奮すると叩いたり、ぶつかったりするのには注意してみてる。

隅地:Sちゃんが、「カラダ伝言ゲーム」で男子だけやった後に、両チームで一斉にやろうとしたら、「女子は?」と抗議してきた。

阿比留:あえて「そういう風に言ってくるかなー」と誘導してみた。

隅地:女子チームは完璧だった!

U(職員):Sちゃんと呼ばれるのは、恥ずかしい。入るのも恥ずかしいけど、入ったらいい感じ。

阿比留:(「カラダ伝言ゲーム」の)目標は1個ズレてやれるように。

神前:列の最初の2人は筋が良かった(Eくん・Bくん)。

隅地:縦一列に並んでくれるだけで嬉しい。

U(職員):Eくんは自分だけでもやろうとしてる。言葉で言われるより、身体で示してやるとできるタイプ。

隅地:個々の得意なことを生かしてきてほしいな。

花沙:久しぶりだったので、最初「誰?」と言われた。でも次第に、後ろから身体をポンと押されたりして、拒否されてない感じだった。壁の男子たちを誘導しても拒否されなかった。そーっと身体を触れてやってみた。またこれから顔を覚えてもらえたら。

鈴村:子供達のエネルギーがすごかった。收拾がつかない感じが大丈夫かなとドキドキすることもあった。

隅地:体から出たがっているものを出してあげたい。施設Aの子どもの收拾のつけかたを探る。

神前:カオスだったけど、收拾がつかない状態ではなかった。全体的には落ち着いて進行できたと思う。

隅地:何が起きているかは、身体のセンサーでキャッチできている。動物的勘がすごい。

神前:センスがいい。ぼーっとしていない。好きにしているが、ちゃんと考えている。

阿比留:こんなことやってもいいんやで、という自由・興味のあることをやってもらいたい。我を忘れてやっていることを、受け入れてあげたい。

U(職員):学童の見方では、電気を消した時の状態が收拾つかない状態(そうなる前に回避できた)。日曜などに、電気を消してお化け屋敷を始めることがある。職員を驚かせたりしている。

それを子ども達が思い出した感じだった。ワークを見ていて、気になることがいっぱいあるが、なるべく口うるさく言わないように気をつけている。この空間でギヤギヤ言い出したらよくない。この空間を壊したくないなと思っている。**鈴村:**今回は私ひとりなので、今日みたいな感じだと正直不安がある。今回はどんな感じだろう。

U(職員):今回はRくんもいる。ポスがいると男の子たちは変わる。季節柄、体調を崩す子もいるので、次回のメンバーは少ない可能性もある。今回はスタッフも男性ばかり。V(職員)さん・KR(職員)さん・IK(職員)さん(初)・U(職員)さん。

第5回目

2019年12月14日 14:00-15:00

施設A ダンスワークショップ

ナビゲーター:

鈴村英理子(えりんぎ)

アシスタント:

高橋芽生子(めいめい)、塩見めいこ(めいちゃん)

コーディネーター:

神前

施設職員:

Vさん、Xさん、IKさん

実習生:

IS・MIさん、MZさん

参加者:

Bくん、Aくん、Dくん、Fちゃん、Jちゃん、Cちゃん、Oくん、Rくん

WS概要

初めにまほさん、あびちゃんの代わりにえりんぎがナビゲートすることを伝え、一緒に参加する仲間としてめいこさんを紹介。自己紹介ダンスを披露する。手ぬぐいを使った踊りをし、子どもたちにも絡んでいき、反応を見ている。ダンスを披露した後、みんなの名前を一人ずつ聞いていった。

ボールパス:円になり、テニスボールを隣の人にパスしていく。速く回すことに挑戦してみたり、背中から回したり、股をくぐらせて回してみたりする。次にパスする相手の名前を呼んで、テニスボールを転がしてパスをする。ボールを2個に増やしてみたら、子どもたちの反応がよかった。

スーパーストレッチ:座ったまま、股関節を柔らかくするストレッチ。足の裏を合わせて、ゆらゆら揺れる。そして転がり起き上がる。次に両腕で丸の形をつくり、ゴムに見立てて、伸びた

り縮んだり捻れたりして動かして、上半身のストレッチをする。さらにペアになって、両腕の輪をつなぎ、切れないように一緒にゴムの動きをする。人に動かされる感覚もあり、思ってもみない方向に身体が動くことを、子どもたちは楽しんでいった。

スーパートレーニング:「おしり歩き」をする。前に歩いたり、後ろに歩いたりする。みんなで壁一列に並び、「おしり歩き」でよいドンをする。Aくんがスタートの合図をしてくれた。ストレッチ、トレーニング共にたくさん身体を動かしたので、「ごきぶり体操」で全身の力を抜く動きをする(寝転がり、両手足を天井に向け、ブラブラする)。

ストップ&ゴー:いつも通り、まずはポーズするところから始め、次にスポーツシリーズ。ポーズした時に近くにいた子に「次何にしよう?」とアイデア聞き、いろんなスポーツのポーズをした。だんだんとスポーツそのものの動きも加わっていった。

少し休憩。

タッチゲーム:ペアになって、じゃんけんで勝った人が手のひらをいろんな高さに出し、負けた人がその手のひらをタッチする。何度か交代して、さらに曲をかけて少しリズムを意識しながらやってみた。手を出す位置も工夫が見られ、全身を使って低い位置や高い位置に手を出したりして、タッチする方も必死にタッチしたりするなど、だんだんと白熱していった。その動く姿がかっこよかったので、見せ合いっこしてはどうかと提案してみたら、「やりたい!」「いやだ」とはっきり伝えてくれたので、全員で見せ合いっこはせず、やる人と見る人に分かれて、動きを発表した。見ていた子に感想を聞いたら、「すごかった」「面白かった」と言ってくれた。

クールダウン

振り返り

神前:Bくん、だんだん落ち着いてきたように見える。Rくんのケンカごしに乗らない。Cちゃんの体力がすごい。Jちゃんが初めてだったが、とても馴染んでいて、楽しんでやってくれていた。

V(職員):まほさん、あびちゃんではなく、えりんぎさんがナビゲートするということが、ちょっと緊張があったかな。今日は今日で楽しんでいった。Aくんのコンディションが初めは乗らなかったが、だんだん波に乗れたかな。Rくん、Oくんは、思春期の恥ずかしさが出てきているが、僕としては楽しんでやってほしいが、強引にはできないし。でも彼らなりに楽しんでいったようで良かった。

神前:Rくん、Oくんは普段からどんな関係なのですか?

V(職員):2人は仲良しというより、先輩後輩のような関係。Oくんは集団の中で引っ張ってくれる人がいると落ち着くタイプ。

神前:ペアになるとき、2人でいっしょに活動できないのはなぜですか?

V(職員):Rくんがわざと突き放す感じ。Oくんが慕っているのをわかっていてやっているようだ。Rくんが子ども同士でペアを組んで楽しむという経験がつめていない。抵抗があり、苦手なタイプである。大人とやることが多い。

◎ペアでゴムの動きをするとき、Rくんだけがペアから外れてしまった状態になった。その時IK(職員)さんが空いていて、RくんもIKさんと組みたそうだったので、神前さんがIKさんに「組んであげてほしい」とお願いしたが、IKさんは組まなかった。IKさんとしては、Rくんが大人ではなく、子ども同士で関わってほしいと望んでいたから組まなかったという意図だった。

神前:Rくんは徐々に能動的に関わりたと思っているのかな?と思った。興味関心は強い。

IK(職員):回数を重ねることできると思う。

神前:ペアワークで、一人空いた時は、ぜひ率先して職員さんにはペアになりに行ってほしい。Rくん、ペアになろうとした時に、動き出そうとしていた。

高橋:その時Oくんとペアになったけど、Oくんは割とスッと一緒にゴムの動きをやってくれた。その時ペアを組めなかったRくんが、Oくんをからかうことになった。

塩見:「クールダウン」の時、Rくんが自分の番が来た時にうつ伏せになったが、嫌がることはなかった。脚を触らせてくれた。

高橋:Rくん、スポーツが好きなんだな。

神前:スポーツの動き、良かった。みんなよく動いていた。

IK(職員):いま流行ってるスポーツの知識を自分で調べたりする子が多い。

神前:今日は、AくんがV(職員)さんにべったりしていたが、それについては?

V(職員):それは波がある。僕はAくん担当の職員で、土曜はがっつり関われる日。それはAくんも分かっている。でもなんであんなに今日はくっついてきたのかな?

◎母子生活支援施設Aは子たちに対して、職員6人体制である(担当する子どもは複数いる)。Aくんの担当はV(職員)さんとW(職員)さん。

神前:Aくんは1対1だと話は通じるが、大勢の中だと伝わりにくい様子。

V(職員):その場の雰囲気に乗ってしまって、こちらの声が届かないことがある。ルールを守

てやる、ということより、楽しさが優先してしま
う。学校とかでは頑張っているとかよく聞く。こ
こでは家の感覚だと思う。

◎「ボールパス」の時に、Aくんが強くパス仕返し
たり、Bくんが飛び出てくるがあった。

鈴村:周りが見えないほどヒートアップしたらお
しまいしようと思っていた。スタッフの方が見
守ってくれていたのをお任せして見ていた。や
りたいことはできた。

高橋:私は実はヒヤヒヤもしてない。女の子は
気を遣って回してくれていたし、あのワークで
名前を覚えられたし、コミュニケーションがで
きた。RくんOくんも積極的に参加していたから
よかった。

神前:外から見たら、危なそうに見えたが、中
にいる人たちは大丈夫だったのかな。見た目にも
ソフトで大きなボールではないから、かえって
注意力が生まれたのかもしれない。

高橋:硬いボールだったから、みんな使い方を
気をつけていたかも。あんまりむやみに投げた
らあかんという意識をしていた。ソフトなボ
ールではないスピード感がワクワクしたかも。

V(職員):学童の部屋では裸足も硬いボールも
禁止している(危ないから)が、このダンスの時
だけ、裸足がOKとか、ボールを使ってOKなのが
嬉しいのかも。ボールが2個に増えたのも嬉し
かったかも。

神前:すごく特別な時間なんですね。

神前:Dくんはどんな感じですか?(参加の仕方
にムラがある)

V(職員):決まった形がないダンスが苦手なタイ
プかも。振りがある方が入りやすいのかも。今
は公園に遊びに行くのがブームで、早く遊びに
行きたかったのかも。

神前:Dくんは毎回集中が切れるのが早い。ワ
ークの好き嫌いははっきりしている。今後どうし
たらいいのかな。最初は積極的だったけど、ベ
アになるのが苦手なのかな。

V(職員):こだわりが強いタイプだと思う。

神前:やってみようとはするけど、続かない様子。

V(職員):活発なタイプではない。最近自転車に
乗れるようになったのが嬉しくて公園に行ってい
る。聞いて理解するというのも1回では難しいの
かも。

◎全体の感想

鈴村:いっぱい一緒にやってくれたし、身体をた
くさん使った。とてもうれしかったし、とても感
心している。普段私よりも小さい子どもと親子
でワークしている。小学生って、こんなにダイナ
ミックで力強いんだと、いろいろな気づきがあ
った。でも身体の使い方が硬くなっていると感じ
るので、ほぐれているような動きを楽しんでほ
しい。

神前:今日ワークする前にイメージしていたこと
に比べてどうだった?

鈴村:いつものまほさんあびちゃんと違うので興
味を持ってくれるかなと期待を持ちつつ。そんな
反応だった。これまでの積み重ねもあると感じ
たし、Rくんはよく見てくれている。「ストップ&
ゴー」の時に、次のアイデア聞いたらすぐ答えて
くれた。みんなとコミュニケーションができてき
て、仲良くなれているなど思った。

神前:いつもと違うというのを楽しんでくれた。
今日はえりんぎさんと一緒に楽しもうというふう
に切り替えて。「自己紹介ダンス」も、一番最初
の出会いの時の雰囲気とは違った。見る時の様
子や、反応も大きくなった。初めてのアシスタ
ントの2人ともあつという間に仲良くなって、よく
体も動かした。たくさんワークをしたけど、急が
せる感じではなく、ひとつひとつのワークを楽し
めたのではないかな。

塩見:この場で一緒に生活をしているからか、
みんなよくお互いを感じているなど思った。子
ども達同士の関係がいいことがわかったから、
安心できた。どの子と目があっても楽しかった
し、私自身も無理して笑うわけでもなく、自然
に楽しめた。

高橋:「自己紹介ダンス」を面白がって見てくれ
たし、やって良かった。子ども達の様子も見れ
たし、グッと距離が縮まった状態でできたので良
かった。いちばん初めに隣がFちゃん、あい
さつした時の返しが丁寧だったので、「しっかり
した子かな」と思ったが、「スーパーストレッチ」
の時にうまくできなくて自信ない感じになって
いて、ちょっと印象が変わった。それぞれの参加
の仕方、出て行く子はなくて、それぞれの
楽しみ方で過ごしていたのが良かった。

V(職員):Fちゃんは体を動かすのが得意では
ないタイプ。ダルマさんができなかった時に、大
人がついてくれたことで受け入れてもらえたと思
う。この場合は否定される場ではない、とい
うことがいい経験になっていると思う。受け入
れてくれたという経験が乏しい子が多いし、一
緒に大人がやってくれたりするのがとてもいい
と思う。

神前:Fちゃんは一定のリズムを刻んでいる感じ。
とてもマイペース。目を合わせてきてくれる。気
づくみんな結構オープンマインド。自分なりに
アピールしてきてくれる。

V(職員):徐々にこのダンスに慣れてきてくれて
いるなど思う。1回目はガチガチだったが、「自己
紹介ダンス」が今回もあったのが良かった。手ぬ
ぐいで関わることでほぐれたかな。

IK(職員):初めて参加した。母子生活支援施設
Aの子は、自由にそれぞれが考えて、自分の意
思を出す場が少ない子が多い。普段も職員の
指示を待つ子が多い中で、自分が考えることが
できる経験がここにはある。普段できない経験
ができる。Dくんはダンスの時間は楽しみにして
いるみたいで、今日も公園に行ってきたけど、「2

時に間に合うように帰ってきた」と言っていた。
興味があるんだな。RくんOくんは本当に拒否し
ているわけじゃないんだなと思った。本当に嫌
だったらすぐ態度に出る。

[第6回目]

2019年12月20日 17:00-18:00

母子生活支援施設Aダンスワークショップ

ナビゲーター:

セレノグラフィカ 隅地歩歩・阿比留修一
(まほさん・あびちゃん)

アシスタント:

花沙(はなさ)、鈴村英理子(えりんぎ)

コーディネーター:

神前

施設職員:

Vさん、Xさん、Uさん、MRさん

参加者:

Bくん、Cちゃん、Jちゃん、Mちゃん、Eくん、
Gちゃん、Hくん、Pくん、Oくん、Rくん、Sちゃん
少しだけ参加…Aくん

見学:

Iちゃん

WS概要

円になり、少し歓談してからスタート。

スーパーストレッチ:座ったまま、足の裏を合わ
せて、ゆらゆら揺れる。10カウントする。そしてま
ほさん、あびちゃんが、ゆっくり転がり起き上が
る。見ていた子どもから「痛そう」と声があり、あ
びちゃんが痛くないやり方をレクチャー。子ども
たちもトライしてみる。そして男子だけでやって
いる時、Oくんが腹筋で起き上がったのを見て、み
んなでトライしてみる。これが大人にとっては結
構難しかった。まほさん、あびちゃんは、この動
きを通して、一人一人とゆっくり関わっていた。

バンバンエイト:頭、肩、胸、お腹、お尻、太
もも、膝、手拍子の順に自分の身体を叩いてい
く。叩く回数を8回、4回、2回、1回とどんどん減
らしたり、スピードを早くしたりする。ラグビー
のハカのように体勢を低く構えてやってみた。

ストップ&ゴー:いつも通り、まずはポーズする
ところから始める。音楽もはじめからかける。P
くんとV(職員)さんが互いに抱き合ってポーズし
ていたところから、タックルをするポーズをし
てみる。2人でやるだけでなく、大勢でスクラム
を組むポーズも出てきた。次に音楽が止まった
ら、転がってポーズをする。立った時に止まる
のがポイント。Aくんが、側転のような動きで転

がったので、それも採用してやってみる。ラストに何をするかリクエストを聞いてみたら、「4回転」や「ブリッジ」と言う声があり、みんなでトライした。

少し休憩。壁登りをしたす子どもたち。

ウェーブ:円になって、まずは万歳の動きを順番にしていく。テンポを早めたり、手の動き方を変えてみたりする。次に首を横に向けた動きやOKサインをしていく。子どもたちからも動きのアイデアが出たりした。首の動きを反対回りで順をまわしたり、OKサインの動きも繋げていく。Sちゃんがバイバイの動きをしたので、それも採用した。最後に一列に並んで、首→OK→バイバイと順番に動き、音楽もかけて動いてみた。そしてまほさんが、「前から見たい子〜？」と声をかけたら、「ちゃんとMちゃんが手を挙げ、前から見てもらう。「すごい〜！」と言っていた。最後にSちゃんに見てもらい終了。

クールダウン

振り返り

全員:土曜日と全然違う雰囲気だった。平日だったからか、やっぱり学校帰りで疲れているのかな。土曜日は落ち着いている。前回、Pくん、Hくん、Eくんがいなかった。この3人がいるといないでは違う。

V(職員):土曜日と比べて賑やかだったからよかった反面、ヒートアップするのが申し訳なかったかな。

神前:「クールダウン」の金魚の時に、V(職員)さんが子どもたちを見ながら何かお考えだった様子ですが?

V(職員):男子の反応を見ていた。思っていたより逃げなかったかな。恥ずかしながらも受け入れてるなど。Pくんはうつ伏せになったけど、やってもらえてた。途中でびっくりかえってくれた。だんだんと受け入れてくれてるなど。ダンスが定着しているなど。

隅地:やっぱり迷うのが、強引になってはいけないな、でももう少しプッシュしたらいいのかな、という繊細なやりとりがある。子どもたちから温かいものを渡してもらえる。100%ではないけど、ある部分は委ねてくれる。その部分がちょっとずつ大きくなっていったらいいな。ゆくゆくは金魚をやってもらえたらいいな。

阿比留:ほとんどの男の子に金魚をやらせてもらえた。まほさんたちがトライしてくれてたけど、男の子は女の子が行くと恥ずかしいかなと思う。「身体を緩めるのが大事やで」と語りかけるとわかってくれる。小さい子がチャチャを入れるとやらせてくれないけど。終わってから、Rくんと蹴

るということについて話した。高く蹴るにはどうしたらいいか?をアドバイスした。

神前:Hくんも帰り際にやっていた。彼は体が柔らかいね。

阿比留:普段しない壁のぼりなんかは男の子にとって嬉しいかな。「できへんし」って言うけど本当はやってみたいんだと思うし、そういう心を持ってるのがいいな。

隅地:Rくん自身が大きくなってた。足が伸びている。みんなの自慢ポイントが知りたいな。Sちゃんに「身長伸ばしてきてな」と言われた。1対1の小さな交換(コミュニケーション)を増やしていきたいな。

花沙:女の子は受け入れてくれる感じがある。男の子も今日も拒否がなかった。私自身も男子2人を育てているので、わが子のように接してみた。

隅地:「ウェーブ」の時、離れてるけどなんとなく円になってくれてたし、表現するわけじゃないから、若干抵抗はないのかな。全員でできたのはすごく嬉しかった。

神前:男の子の動きを見たら、かっこいいって気づくかも。Cちゃんがずっと寝そべっていたけど、案外ダンスとしてかっこよく見えた。他の現場ではあんまりみないパターン。Bくんがはみ出してしまうことも、離れてみるとかっこよく見える。ちゃんとやってくれたらかっこよく見えるんだな。

鈴村:Jちゃんが、すぐに挨拶にきてくれて「土曜日は楽しかった、今日も楽しみ」と言ってくれたのが嬉しかった。Rくんは、前よりだんだん参加してくれるようになった。動き出してきている。

神前:最初の少し距離がある様子見の状態から、「ストップ&ゴー」で曲をかけた時に、パートと動き出す。みんな音楽に敏感に反応する。

V(職員):走ったりするのは、普段学童でやってはいけないこと。BGMでポップを流すことはあるけど、ダンスの時は曲も違うし、ダンスの活動が、ある一定のペースでやってるものだから、特別感がある。

神前:ぶつかる回数がなくなるといいですね。小さいから余計にすばしっこいし、2人ともすごく動くから。

隅地:Mちゃんの足のこともあるしね。でも自分で参加したり、ここは参加しないって判断できていた。

神前:Cちゃんが今日は落ち着きがなかった。ストレッチのだるまさんもいつもやるのに今日はやらなかったなあ。今日はずっとBくんと追いかけていた。「ストップ&ゴー」もよくやるのに、今日はどうしたのかな。

X(職員):ここ最近不調。何かあったか時はわかりやすい。みんなに気にしてほしいので、態度に出る。今日は私にくっついてた。

隅地:日常の中の些細なことでも、何かあったら

身体には反映される。調子がある波をこちらも受け入れて、私たちは変わらずに受け入れていく。ちょっとずつ信頼関係を築いていく。加速度をかけずにしていけたらいいのかな。

X(職員):土曜日はやっぱりおやすみモード。金曜は学校から帰って、宿題して、ダンス。と慌ただしい。Gちゃんは圧倒されて、動けなくなっていた。自信がなくて、誰かにひっついてる。「ウェーブ」でみんなで一列になっている時、私の後ろにいたが、自分でやりたいと言って、並んでいたのよかった。楽しいから参加したい、というのは彼女の中にあるんだな。それがよかった。Iちゃんはそろそろ参加できそうだな。初めは泣いていたのが、今日は抵抗なく最初から最後まで見ていた。終わりに「次は一緒にやろうな」と言ったら、「へへっ」と笑っていた。自分の思っていたダンスの活動とは違ったタイプで、自由だなと感じて、参加できそうと思ったのでは。時間はかかったけど。

神前:楽しそうにみていた。アンケートも楽しかったと書いてくれていた。

神前:最終回は「ウェーブ」の曲をみんなで楽しく踊れたら。みんなだけでやるかどうか。普段の活動は保護者がいないけど、最後回だけ保護者の方に見てもらおうかどうか。……また次回以降に話しましょう。

[第7回目]

2020年1月17日 17:00-18:00

母子生活支援施設Aダンスワークショップ

ナビゲーター:

セレノグラフィカ 隅地菜歩・阿比留修一
(まほさん・あびちゃん)

アシスタント:

花沙(はなさ)、鈴村英理子(えりんぎ)

コーディネーター:

鈴村

施設職員:

Vさん、Xさん、Wさん

実習生:

AMさん、KWさん

参加者:

Aくん、Dくん、Jちゃん、Nちゃん、Eくん、Gちゃん、Lちゃん、Hくん、Pくん、Oくん、Rくん

見学:

Iちゃん

WS概要

17時近くになっても、まだ会場の準備ができてなく、子どもたちもあまり集まっていない状態。徐々に子どもたちが集まり、17:15からスタート。子どもたち、落ち着きがない様子。まずはあびちゃんから、顔が腫れてしまって、マスクをして

いることの説明をする。当初は「ストレッチ」からスタートしたかったが、子どもたちの様子を見て、動きがあるワークから始めることにする。

人を飛び越える:あびちゃんが座り、その上を飛び越えていく。ジャンプしたり、跨いだり。飛び越えたら花沙さんにタッチして戻る、人が2人、3人に増えて飛び越えていく、などバリエーションを増やしていく。次に飛び越えたら、身体の下を潜ることもチャレンジ。これも2人、3人と増えていく。女の子3人が座ってみたが、男子はOKくんだけが飛び越えた。最後にあびちゃん、Vさん、AMさんが座り、順番に飛び越えていく。男の子より女の子の方が積極的にやっていた。

少し休憩。男子はビデオカメラに興味をもつ。

ウェーブ:まず大人が間隔をあけて並び、その間に子どもたちに入ってもらったようにした。前回やった動きを確認。首振りの動きを往復し、OKサインも往復、両腕を高く上げ、低い姿勢になる。という流れ。確認したあと、音楽をかけてやろうとするが、なかなか子どもたちが集中しないので、始めることができない状態に。まほさん、あびちゃんが子どもたちに厳しい言葉をかけ、始めることができる状態まで待つ。そして子どもたちが始められる状態になったところで音楽をかけた。その時の「ウェーブ」はスムーズに進んでいった。次にステップをレクチャーし、お辞儀するところまで進む。最後にその新しい動きの部分を通して終了。

クールダウン:電気を消して暗くしたがる子どもたち。少し薄暗くしてクールダウン。今回は金魚はできなかった。

振り返り

隅地:冬休みの感じ、新学期始まった感じはどんな感じだったか？今日は始まるのが遅れてしまったが、始まりが遅れた場合でも18時に終わった方がいいのか？もし仮に早く始められそうだったら、机の片付け等も手伝うので言ってほしい。

W(職員):児童館に行ってる子が帰ってくるのが17時すぎてしまう。でも17-18時の枠の中でお願いしたい。

V(職員):今日は職員が3人しかなくて準備が遅くなってしまった。子どもたち全体的にコンディションが良くなかったなあ。

隅地:何か理由があったりするのだろうか。これということはなくても、少しこんなことがあった、とか、この子は今日はこんな状態とか。

V(職員):全体的に落ち着きがないという感じ。お正月明けだからというわけではない。Aくん

は、始まる前にお母さんに会ったので、お母さんといたくて部屋に戻ったりした。男子が意地悪することが多く、Aくんも意地悪する。Lちゃんも。子どもたち同士で意地悪して、ダンスに集中してないという感じだった。

隅地:思春期にさしかかっている子と、無邪気な小さな子、異性を気になり出した女の子がいたりして、身体を使って一緒に何かをするときに、女の子がやりたいこと、男の子がやりたいこと、興味を持つことなどが必ずしも一致するわけではないので、色々な素材を提示してみて、今日はこれが面白かった、これに熱中してきた、ということがそれぞれにあればいいなということを模索している。もっと仲良くなって、子どもたちと意見を交わし会えたら、ダイレクトにやり取りできたら。今後やっていけたらという望みがある。女の子はすぐくアクティブだった。人を飛び越えるワークは本当はペアワークなのだが、みんなでやったほうが楽しいかなと思って、今日のワークとして提案した。

阿比留:女の子が座って並んだ時、男の子は女の子を気遣ってやらなかったかな。ここの施設では、全員で何かをすることはあるのか？

W(職員):「文化の集い」でよさこいを踊るのは全員の取り組み。でも今年はみんなで踊ることが難しい子が多いから、作品を作って展示することにした。出られる子は新年パーティで踊ったり、学童終わりに練習している。

隅地:よさこいはみんなで作るんですね？このダンスと何が違うのだろうか？

V(職員):よさこい、パーティはゴールがある。発表という。

阿比留:今日部屋に入ったときにびっくりしたのは、男の子一人ひとり興味があることをすごく聞いてくる。身体の使い方とか。なのに全員集まるとシュンと弱くなる。一斉にやろうとすると構えてしまうのかな。

W(職員):いろんなことに興味ある子が多いけど、自信がない子が多い。みんながいると人の目が気になってしまう。自分が出せなくなってしまう。女の子は、Lちゃんは自分から発言できる。Gちゃんは最近女子特有の、女子同士一緒になって固まってしまうようになっている。Lちゃんが見学しているのを見て、一緒にしてみたくなかったのかな。

阿比留:興味があることには普通にコミュニケーションできるんだけど。今日はビデオに興味を持っていた。

隅地:(飛び越えるワークの時)男の子はカーテンの隅に寄りがちだったけど、OKくんが「俺行くわ」と飛び始めていたのがよかった。

花沙:飛ぶのが好きで、飛んでいたかな。

阿比留:Rくんを気にして、端っこからスタートしていた。

隅地:飛んだり、応援の声かけも、Rくんを気遣っているのかな。

阿比留:子どもたちとの話の中で、「Rくんはな

んでもできるからな」で話が終わってしまう。みんな自分は敵わないと思っているのかな。

隅地:考えようのかな。外から来ている私たちがフラットに子どもたちを見ていたい。分担したほうがいいのか。男の子はあびちゃん、女の子はえりんぎさんや花沙さん、とか。個々に関係を作っていくようにしたらいいのか。

阿比留:「ウェーブ」の時、ちょっとキツイことを言って、じっとするまで待つことをしたから、拗ねてるかな。OKくん？

隅地:職員さんからご覧になって、もっとこう接したらいい、ということがあれば・

W(職員):さっき言っていた場面では、ワチャワチャしていて申し訳ないと思いつつ、どこまで言ったらいいのかと迷った。子どもたちもこのダンスは、甘えてハッチャケている時間なのかな。でもあの時、空気が変わったのを察知した子もいた。今までこの時間は好きにさせてもらっていただけに、「え？」となった子もいるのかな。「今は聞く時やで」ということがわかれば、こちらからも言っていきたい。今はどういう感じかな？ということがわからなくて迷ってしまう。それがわかれば、子どもたちに声かけができる。

花沙:今日は女の子の雰囲気が違う。Nちゃんが初めてで、積極的な子でいいなと思った。初日に会ったときと、Lちゃんの印象が違う。自分を出すという印象が強かった。Lちゃん、Lちゃん、部屋に入るのか入らないのか迷っていたけど、みんなが飛び出したら、面白そうと思って入ってきた。見て、自分で判断して入るというのが、いつもと違う印象を受けた。

W(職員):Nちゃんはこの時間は出かけることが多くて不参加だったけど、元気な子。ダンスに来てよかった。Gちゃんとケンカしていた。

鈴村:Gちゃんに、飛ぶ遊び(飛石のように)やろうよ、と声かけをしてみたが、「人をまたぐのがいや」と言ってやらなかった。その後も、ずっとやらなかった。

V(職員):融通のきかない部分があって、人から言われたこと、「これはしてはいけない」ということを守るタイプ。

W(職員):今日はコンディションが悪かった。名前を書くときにひらがなで書いたことを嫌がったから、漢字で書いたけど、それも嫌がった。多分なんでも嫌だっけ言いたい日だったのかな。

鈴村:Dくんが今まで一番やってくれた。

W(職員):一度家に帰ってから来ているから、気持ちがりセットされていた。

V(職員):「今日はダンスだから17時に帰ってきてね」と声をかけていた。

阿比留:子どものコンディションを聞いておくのも大事ですね。

隅地:モードを切り替えるときは切り替えて、コントラストがつけられるようになってみたい。

V(職員):今日みたいな厳しい面もあってよかったかなと思う。無秩序と自由は違うから、締めるところは締めてもいいと思う。ゴールがないから難しいけど、これはこれで大事な場としておきたい。

阿比留:やればできるということを伝えたい。

V(職員):自己肯定感を高めるためにも、ぜひ言ってもらいたい。

第8回目

2020年1月18日 14:00-15:00

母子生活支援施設Aダンスワークショップ

ナビゲーター:

花沙(はなさ)、鈴木英理子(えりんぎ)

アシスタント:

塩見めいこ(めいちゃん)

コーディネーター:

鈴木

施設職員:

Vさん、Xさん、Wさん、IKさん

実習生:

AMさん

参加者:

Aくん、Bくん、Pくん、Oくん、Qくん、Rくん、Cちゃん、Fちゃん、Gちゃん

WS概要

静かな状態から円になってスタート。みんなスムーズに集まってくる。

身体の実験(えりんぎ):まず前屈をし、どのくらいまで手がつか確認。それから簡単な指の操作をしたあと、再び前屈をし、さっきとの違いを確認する。はじめより手をつく位置が変わった子が多く、驚いたり、盛り上がる。次に片足バランスも、簡単な操作で変化することを実験。それぞれ変化を感じたようだった。

ストレッチ(えりんぎ):両手を組んで、腕を輪ゴムに見立て、伸びたり縮んだりさせてストレッチ。ペアになって、腕を組み合わせ、「輪ゴムが切れない」ように一緒に動く。3、4人で組んで動いてみる。最後に全員で手を繋いで、大きな輪ゴムになり、伸びたり縮んだりし、だんだん絡ませていく。ある程度絡まったら、解いていく。

ストップ&ゴー(花沙):いつも通り、まずはポーズするところから始める。忍者みたいに走るように指示。片手を床につくポーズ、片足バランスでポーズしたあと、音楽をかけてやってみる。スポーツシリーズのポーズや、子どもたちからのアイデアも取り入れてやってみる。電車になっ

て、繋がる動きも新しく出てきた。

みんなで呼吸を整える。

風船(花沙):円になって座り、風船を隣の人にしっかり手渡しするようにパスしていく。次に少しふわっと高く上げてパスをする。一通り回ったら、座ったまま自由にパスしあう。風船を2個に増やしてチャレンジしてみる。次に立ち上がり、自由にパス。手だけでなく、頭や足も使ってパスしたりするように指示。今度は2グループに分かれて、自由にパスしあった後、手を繋いだまま風船をパスすることにチャレンジ。そして互いのグループで見合いっこすることにし、移動しながらパスをするという動きを見合いっこした。子どもたちは意欲的に取り組んでいた。

ウェーブ:初めての子もいたので、前回やった動きを復習しながらレクチャー。ペンタトニックスのことを調べたか聞くと、早速Rくんは調べたようだった。音楽をかけて通すと、男の子は歌い出した。1回通した後、「前から見たい子?」と声をかけると、QくんとBくんとX(職員)が前に来て、見てくれた。最後の挨拶の場面も練習し、もう1度通して終了。

クールダウン:今回は金魚ができた。

振り返り

花沙:Pくんが意外に優しい面があると発見。手をつなぐときは、恥ずかしいながらも手をつないでくれたり。

V(職員):昨日に比べると穏やかで落ち着いていた。曜日が変わるだけで、こんなに変わるものか。数人子どもが入り替わるだけでこんなに変わるんだな。金曜は学校行って、帰ってくる。低学年は学校の後、児童館に行って、帰ってくる。児童館も騒がしいところなので、そのままの雰囲気を持って帰ってくる。今日は10時半くらいから勉強して、遊んで、とゆっくりした時間の中でダンスに取り組む。昨日より落ち着いていた。

鈴木:始まる時に、すごく静かでおどろいた。

V(職員):Qくんは初めての参加かな。

花沙:10月の初めの頃に1回だけ来たかな。映像に映っていた。(2回目に参加していた)

V(職員):Qくんは予想通り、なかなか向き合えないところもあったけど、「ストップ&ゴー」の時に逆立ちして止まったり、ダンスも見えていたり。途中で出て行かかなと思ったけど、出て行かなかつたし、「風船」も参加したからよかったかな。気に入らないと飛び出してしまう子なので、参加できてよかった。えりんぎさん、今日はGちゃんによく声をかけてくれてたけど、なにか意識しましたか。

鈴木:Gちゃんは、昨日もやらない感じだったので、今日からはじめはやりにくそうにしていた。(ストレッ

チの)ゴムの動きをペアで行う時も、組んでくれなかった。彼女の中で、何か複雑な思いがあるのかな。今日は、AM先生にピッタリくっついてた。

V(職員):できるものは一緒にやって、やりたくないものは見ているもいいという柔軟な場というのが、自由と履き違えてしまわないか心配。そこを職員は見ていきたいと思う。

花沙:Qくんが初めてで(映像では見ていたが)、自分がしたいことを優先してしまうタイプだけど、「風船」のワークでAくんとチームを組んだ時に、嫌がってたAくんに、Qくんが「やろう」と声をかけてくれた。言える力もあるんやなと思って感動した。

V(職員):自分の意思をバンッと出す子ではあるけど、優しい面もある。割と注意されることが多い子だけど、そういう部分も今日はあってよかったな。

花沙:今日は風船を使うが悩んだ。昨日のことを思うと、でも子どもたちが喜ぶと思って出してみた。終わった後にすぐ回収するようにしたけど、Qくんはもっとやりたがっていて、それを強制的に回収しちゃったのが申し訳なかったけど、回収した。

V(職員):それでいいと思います。ちゃんとメリハリをつけることも大事なので。

塩見:前回参加した時はQくんがなくて、高学年の子たちが参加するかしなにか緊張した雰囲気があったけど、「風船」の時にQくんが強く風船を返す様子を見て、高学年の子たちがその空気を感じて優しく返してくれてたのが、すごくいい雰囲気だなと思った。

V(職員):確かにそうだったですね。Qくんのあの感じは良くも悪くも自由。他の子は真似できない。5年生だからもっと周りを見て欲しいけど、よく言えば無邪気だし、自由。Rくんは周りがよく見えてるし、Pくんも見えてる。Oくんはまだかな。彼らはQくんの様子を見てバランスを取ってくれたかな。RくんもQくんの自由な部分が羨ましいと思うところがあるかな。

塩見:ダンスの時間の、「風船」の時間の中で、思っきり叩いてよくて、それを受け取ってくれる人たちがいるだけで、それだけで十分なのかな。全員がバランスよくできるんじゃないかな。

花沙:手を繋ぐのは苦手な子が多いかなと思うけど、みんなで手を繋いだ時に、PくんとRくんはすぐ繋いだけど、Oくんは嫌がってた。Rくんが花沙と手を繋いだ時に「僕、頑張ってるねん、だから頑張れや」とOくんに言っていた場面があった。

V(職員):女性と手をつなぐことが恥ずかしい時期なので、なかなか手を繋ぎにくいけど、そこでPくんが動いてくれたのはよかった。Oくんも能動的なタイプではない。この子たちは周囲の目を気にする子が多い。最近PくんとOくんが一緒にいることが多い。同級生同士で仲良くなっていい感じですね。HくんとEくんは仲良し。よく一緒に帰ってきたりしてる。BくんとQくんが「風船」の時に乱していたけど、大丈夫だったかな。

花沙: そうなるかなと予想していた。だからまず座ってやってみただけ、どんどん動き出した。

鈴村: 声かけの仕方、風船のパスの仕方も変わるけど、その声をかけるか悩みますね。例えば「爆弾だと思ってみる」とか「ものすごく大切なもの」とか。

V(職員): それもやったら面白いかもしれませんね。

花沙: 立ち上がった時に、もっと具体的なことを言ってもよかったですね。

塩見: なんとなく、思春期の子たちって指示されるのを嫌がるよね。自分がどうしたいってことを感じてもらおうのが大事なかな。みんなに合わせなくても、強い子に流されなくても。自分も人の目をすごく気にするタイプなので、今ようやくこの歳になって、自分がどうしたいかを問いかけて行動しているところ。「それでいいんだよ」という眼差しを持っていたいなと思う。特に流されやすい時期だから。

鈴村: Cちゃん、Fちゃんはマイペースに取り組んでいるのがとてもいい。Cちゃんは「ウェーブ」の時に、ずっと寝転んだままだったけど、その体勢でもちゃんとそれなりに動いていたのが面白かった。

V(職員): 学童だったら、「ちゃんと立ってやりなさい」と言われるところだが、このダンスではそれで受け止めてもらえるのが、このダンスの強みだと思う。僕自身、まだ2年しか働いていないから、どうしても自分も「立ちや」と言いたくなってしまいうけど、どこまで擦り合わせて行ったらいいか、職員とナビゲーターとで話をしたいなと思う。

花沙: 私も手探りだけど、一応「やってみよう」と声はかける。彼女らの反応を見て、完全に拒否の時はやめるし、もうひと押しする時は誘う、すごく手探り。「ウェーブ」は一列にならないとできないことなので自由度も少ないけど、一列にならないと成立しないので声かけはする。

鈴村: その時、その時の反応をよく見て、大事にするけれど、やるときは「やろう!」と声かけはきちんとする。「ウェーブ」の一列や、はじめの挨拶、終わりの挨拶は、きちんとする。今日は終わりの挨拶で、Rくんがしゃべっていたので、「Aくん、挨拶しよう」と声をかけた。もちろん、危険な行為などに対しても、注意を促す。聞かなければいけない場面では、「きちんと聞こうね」と声かけをする。

塩見: 大人も「私がやりたいからやるねん」という役になろう。職員さんも「俺はやるで」と本気でやると、その空気になるのかな。大人も子どももそれは一緒に、やりたい時は思いっきりやるというのが伝わるのかな。「ちゃんとやりや」と言われると、拒否したくなるのかな。IKさんがすごく一緒にやってくれてたのがよかった。

Vさん: IKさんがいることで、男の子たちも引っ張られたかな。

塩見: 最後に挨拶するところでも、思いっきりお辞儀して戻る、というのもいいな。

花沙: まず大人が一生懸命やってる姿を見せる、

ということが「先生もこんな面があるんだ」と気づいてもらったり、そんな姿に子供たちも引っ張られて行くのかな。いつもと違う先生の姿を子どもたちは見ているんだろうな。

【第9回目】

2020年2月8日 14:00-15:00

母子生活支援施設Aダンスワークショップ

ナビゲーター:

花沙(はなさ)、鈴村英理子(えりんぎ)

アシスタント:

高橋芽生子(めいめい)

コーディネーター:

鈴村

施設職員:

Vさん、Xさん、KLさん

実習生:

OKさん、KBさん

参加者:

Dくん、Pくん、Oくん、Rくん、Gちゃん

WS概要

円になってスタート。手から順番に身体をなでてほぐしていく。

身体の実験(えりんぎ): 前回と同じく、まず前屈をし、どのくらいまで手がつくか確認。それから簡単な指の操作をしたあと、再び前屈をし、さっきとの違いを確認する。次に、立位の状態で、上体をひねる。手首をすこしマッサージした後、もう一度、上体をひねると、さっきよりもよくひねることができると確認する。

ストレッチ(えりんぎ): 一つに繋がった長いヒモを全員でもつ。びんと張った状態を保つ。まずは、高く上げたり、下げたり、少し移動したり。ひもをびんと張ったまま、低い姿勢、高い姿勢なども経験する。まずは大人が、ひもをもったまま、交差などをして、いろいろな大きさのひもの「窓」をつくる。その「窓」を、子どもたちが潜り抜けたりしながら、通ってみる。次に、子どもたちがひもをもち、交差などをして、ひもの「窓」をつくる。そこを、大人が通りぬけてみる。最後はみんなで円になって、びんとはった状態で、いきなり手をはなす。

風船(花沙): 円になって座り、座ったまま自由にパスしあう。風船を2個に増やしてチャレンジしてみる。次に立ち上がり、自由にパス。手だけでなく、頭や足も使ってパスしたりするように指示。今度は2グループに分かれて、自由にパスしあった後、手を繋いだまま風船をパスすることにチャ

レンジ。移動も取り入れながら、風船をパスする。男の子たちは、手をつなぐことに抵抗があるため、手をグーにしたまま。カラダの他の部位を使ってパスすることにした。次に、風船にガムテープをつけて重さを変えた状態で、手をつないだままパスをする。最後に全員で円になって、2つの風船を手をつないだままパスをする。

休憩

タッチゲーム(えりんぎ): まずはペアになるのに時間がかかった。じゃんけんをして勝った人から、手をだして、相手はそれをタッチする。2人組になることが苦手な男の子たちを見て、V(職員)さんが、Oくんと組む。PくんとRくんがペアになる。Dくんは、X(職員)さんと見学をする。Gちゃんは、実習生KBさんと組む。無音で練習した後、音楽をかけて、やってみる(カメラ横にRくんとPくんが隠れてやっている)。

ウェーブ: 人数も少なかったので、スムーズに一列になる。Dくんも、集中力は切れていたが、参加することができた。動きの確認もスムーズに進み、音楽をかけてやってみる。2回目はDくんとGちゃんとKL先生が、前から見てみる。音楽をかけて通す。Gちゃんが男子に対して厳しいダメ出しをしていた。

ケールダウン: 今回は比較的静かに横になることができ、しっかりと身体を休めることに集中してみた。

振り返り

花沙: 今日は人数が少なく、少しほっこりしたような雰囲気だった。

V(職員): 過去で一番少なかったが、いい雰囲気でした。Gちゃんが大人数の時より参加しやすいような雰囲気だった。女の子が一人だったから心配だったが、意外だった。

花沙: 先月元気がなかったので大丈夫かなと思ってたけど、今日は普通に話してくれたし、実習の人とも一緒にワークしていたし、先月より明るいGちゃんが見れてよかったな。

V(職員): 先月はコンディションが悪かったけど、今日は良かったかな。実習生と組んでやることもできるんやと。タッチするのも一緒にできてたし、人数少ない方がいけるんだとびっくり。少ない時の方がやりやすいのかなと思ったり。そのほうがやりやすかったら、人数制限をかけるとか。金曜と土曜で分けてやってもいいかも、金曜は低学年、土曜は高学年……と設定するとやりやすいのかな。というのを今日見て思った。

花沙: 子どもによって、大人数がいいか、少人数がいいかわかるかな。

V(職員): Dちゃんの集中力のなさは、いつも通

りかな。今日は公園で鬼ごっこしていたのを抜けてこっちに来たらしい。帰ってきてくれたのは良かったな。

花沙:ちょっとずつだけ顔を覚えてもらって嬉しい。

V(職員):Dちゃんがウェーブのこともちゃんと覚えていたのもびっくり。参加率が高いわけではないけど、意識には残っているんだな。「風船」とか楽しんでたから良かった。

花沙:「風船」の時に一緒に参加してみて、男の子が女性と手を繋ぐのが難しいんだと実感した。(手を繋がないように)手はグーにしてやってみた。男の先生やったら抵抗なく繋いでくれるのかなと思った。

V(職員):高学年だし、思春期だし、恥ずかしがって当然かな。それでもグーにしてやってくれたのは良かったかな。

花沙:このワークショップは男の子参加率が高い。

V(職員):Rくんは皆勤賞じゃないかな。(実際は1回お休みした)

花沙:見通しを持った上で参加しているから、最初よりは緊張がほぐれていると思う。

V(職員):土曜はそれぞれの家庭の用事があって、参加率が悪くなってしまうのは申し訳ないな。「風船」の時の男子たちに気になる事はありましたか?

花沙:特になく、スポーツのように動きがしっかりできてる。

高橋:目標や設定をつけたら、それを達成しようと頑張ってた。

V(職員):男の子は設定があったり、スポーツ系のことであれば、乗りやすいかな。

花沙:今日は前にやったことのある見通しの持てることをやってみた。気持ちもリラックスしてできるかなと。

鈴村:今日はお互いのんびりとした気持ちで、はじめられた。今日はヒモを使って、ストレッチの延長として取り組んだ。みんな、ひもを楽しんでくれていた。

高橋:今日は人数がちょうどよかった。多い人数だと、ヒモは難しかった。

鈴村:よく気を付けながらする必要はあるかな。

高橋:おっとっと、となったりした。ヒモをひっぱって、離れたところにいる人にも影響がでるところまで、子どもたちは、気が付くことができるかな。

鈴村:ヒモを持ち、離れたところでひっぱる人がいることで、思いもよらない動きがでたりする面白さはある。危険だなと感じた場合は、ストップをかける。今日は、なるべくヒモが緊張した状態をキープするようにした。ひもがゆるまると、崩れるから。カラダでわかるかな。

V(職員):子どもたちは、今日のようなヒモのワークはやったことがないと思う。からまる感じとかも、楽しかったのではないかな。ヒモが連動していく感じは、たしかに低学年は、把握できないかもしれないけれど、高学年のRくんであれ

ば、わかると思う。

V(職員):Rくんはたまにちょっかいを出したりする。Oくんはカメラの前でダンスするようにと言ったり。

高橋:カメラワークを意識して、Oくんに指示してたから逆にすごいなと思ったけど。

V(職員):そこまで考えてたかな。RくんがいないとOくん、Pくんはいい感じののだが、Rくんがいるとちょっと……という感じになってしまう。その辺の判断が2人はできるようになるといいのになと思ってる。Rくんが、みんなにとって良いことにたいして、「みんなやろうぜ」と先導してくれるようになってくれるといいのだが。

鈴村:今日の「クールダウン」はみんな割と寝ていたかなと思う。

V(職員):今日はAくんもいなかったし、Rくんがからかうこともなかったから、良かったのかな。

鈴村:「ウェーブ」の時に、見ていたGちゃんがダメ出しを男子にしたのが「おお」と思った。ああやって小さい子に言われて、男の子たちは何を思ったかな。

V(職員):Gちゃんは間違ったこと言ってないですね。

鈴村:それで男の子たちが変わったらいいなあ。

高橋:ステップの動きは、曲がないところではやっていたりして、曲に合わせるのは恥ずかしいけど、この振り好きなんだと思った。前に出て挨拶するときにRくんが拍手をちょっとしてくれて、それが嬉しかった。えりんぎちゃんが「前で見えていいよ」と言った時に、男子が見なかったのが意外だった。見るより、見られることの嬉しさをちょっと感じているのかな。

花沙:見られることで身体の感じが変わってくるので、それを感じつつあるのかな。最近体調を崩している子はいますか?

V(職員):Cちゃんは今日は体調不良で欠席です。他の子は遊びに出かけていたり。

鈴村:Sちゃんがちらっと来たけど、最近はどうな感じ?

V(職員):最近友達と遊ぶことが多い。6年生だし、色々あるのかな。高学年女子が1人だけだと参加しづらいのかな。せっかくだし参加してほしいけど、チラッと見に来たのは、やってるのを確認しに来たのかな。

花沙:安心して自分を出せる場があるのはいいですね。中学になったら、色々変わるでしょうね。

[第10回目]

2020年2月14日 17:00-18:00

母子生活支援施設A ダンスワークショップ

ナビゲーター:

セレノグラフィカ 隅地菜歩・阿比留修一

(まほさん・あびちゃん)

アシスタント:

花沙(はなさ)、鈴村英理子(えりんぎ)

コーディネーター:

神前

施設職員:

Uさん、Xさん、Wさん、IKさん

実習生:

OKさん、KBさん

参加者:

Aくん、Bくん、Dくん、Eくん、Hくん、Pくん、Rくん、Cちゃん、Gちゃん、Lちゃん、Iちゃん、Kちゃん、Tちゃん、Sちゃん

WS概要

16:45からスタート。円になって挨拶したあと、花沙からワークを始める。

ウォームアップ(花沙):まず両足をピタッとくっつけて真っ直ぐに立つ。次にかかとをくっつけたまま、つま先を外側に開く。ペンギンのポーズ。その状態でお腹を叩く。そして両足をピタッとくっつけたポーズに戻る。次につま先をくっつけたまま、かかとを外側に開く。内股ペンギン。その状態でお腹を叩き、また元に戻る。次につま先をくっつけたまま、かかとを外向きに。さらにつま先を外側に開き、どんどん足を広げていく。足を広げた状態で上半身を前に倒し、飛行機のポーズ。片手を天井にあげ、上半身をひねるポーズをしてストレッチ。そして床に両手をついて上体反らしをする。次に花沙とじゃんけんをして負けた人が、ペンギンの足をどんどん開いていき、手をついた人が負けというゲームをする。みんなで行ったあと、ペアになってゲームをした。

風船(花沙):円になって座り、座ったまま自由にパスしあう。人数が多く、円が広いのでなかなか相手に届かなくて苦戦していたが、みんな楽しんでた。風船を2個に増やしてみると、動きが大きくなってきたので、立ち上がり、自由にパス。やはり人数が多すぎるとぶつかりそうになったりするので、2グループに分かれて、自由にパスしあう。次に手を繋いだまま風船をパスすることにチャレンジした。

タッチゲーム(えりんぎ):じゃんけんをして勝った人が、手をだして、相手はそれをタッチする。えりんぎと花沙で見本を見せたあと、ペアになって練習。そのあと音楽をかけて、やってみる。走り出す子がいたり、どんどん動きがダイナミックになっていくのが印象的だった。激しい動きになっていたため、最後にみんなで呼吸を整えた。

休憩

ストップ&ゴー(まほさん):音楽がなったら歩く、

音楽が止まったら止まる。誰かにくっついて止まる、全員でくっついて止まるという指示をする。1回目は全員でくっつけなかったが、2回目はほとんどの子がくっついてた。そのまま壁にくっつき、みんな座る。次にナビゲーター4人で、「何も言わずに歩き、何も言わずに止まる」という動きをみんなに見せた。4人が何をしているか、みんなに考えてもらう。「同じことをみんなもやってください」と言うと、「無理」と言う声がある。誰が合図を出していたか、常に全員を見て、感じていないといけないということを伝える。みんなで作ってみて、そのあと2グループに分かれてチャレンジしてみた。

ウェーブ:動きの確認をしてから、音楽をかけて通してみる。続きの振り付けも即興的にみんなで踊った。

クールダウン:部屋を真っ暗にして寝転んだ。呼吸の指示をしたり、「静かに寝ている人のために、お話しする言葉をちょっとでも消してあげようかな」という気持ちになると、いろんなことが聞こえてきます」とまほさんが伝える。最後に円になって、1人ずつ感想を聞いて、挨拶をして終了。記念撮影もした。

振り返り

U(職員):久しぶりに参加してみたら、雰囲気が変わっていてびっくりした。こんな風に参加ができるようになったんだと、1ちゃんも参加したりとか、Hくんもみんなの動きと一緒にできていたのがよかった。時間がかかっても、関係ができていくと安心して入れるのかなと。楽しそうにやっているのがよかった。

W(職員):(10回を振り返って)途中で中だるみや参加できない時もあったけど、その時に比べても今日は参加してくれる子が多かったし、1ちゃん、Sちゃんもやってくれた。私自身もみんなと一緒にできたのが楽しかった。「クールダウン」の時も、みんなが「これよかった」とボソボソ言いながら、考える時間もあって、楽しかったし、やらせてもらえてよかった。ありがとうございました。

阿比留:Hくんと今日は近づけた。彼が興味のあること、前は「高く足をあげるには」みたいなことを聞いてきたし、今日は鉛筆の話(ペン回し)になって、興味のあることはずっとこだわっていて、それが良いふうに関係性を作るきっかけになった。色々思うことがあるようだけれど、顔や目を合わせられるようになってきた。「来てもいいよ」という感じ。恥ずかしいのも取れてきて、一緒にやっていたらいいな。思いの外、Sちゃんが「もう卒業やし」と言ってくれて、寂しいのかなと思った。

隅地:2回参加できず、1月以来でした。壁際からスタートするメンバーが、参加するまでの時間が今日はあまりかからなかった。ずっと集中力

を保つのが難しいのはいいのだが、あの男の子たちが、「しゃないからやってやるか」みたいな感じで参加してくれるところもあって。参加の仕方がそれぞれ。私が面と向かっていくと、やらなかったりするが、見えてないところで面白いことをやっているのがいいなあ。1対1の関わりを、めいめいが作っていくのいいのかな。Dくんと顔で合図するやり取りをしていた。今の瞬間のDくんにどうタッチしていくのか。そういうことをそれぞれにちょっとずつチャンネルみたいなものを持っていけばいいのかなと。

花沙:初めてのお友達がいたけど、そんなに拒否感なく参加していたかなと。それが嬉しかった。男の子たちの「やろっかな」という空気を感じた。1月に気になっていたGちゃんが、ちゃんと顔を見せてくれたり、学校帰りに挨拶してくれたり、覚えててくれてるんだな、と。Lちゃんも顔を覚えてくれていて、親しみを少しずつ持っているんだなと。

鈴村:いつも金曜日は、ちょっと(落ち着かなくて)大変だという印象があった。土曜日との雰囲気が大きく違う。今日は、金曜日で人数も多かったが、皆いい感じで参加できていたかな。これまでの積み重ねがあったからかな。一人ひとりとの関わりも、少しずつできてきた。関係性を作りつつあるように思う。「タッチゲーム」のときも、HくんとEくんも一緒にやってくれた。男の子たちも一緒にやってくれていた。

隅地:最後に感想を聞いていったとき、耳を寄せて行ったら、ちゃんとその子の言葉で答えてくれたり、「もっと激しい(運動量が多い)のがやりたい」などリクエストがもらえて嬉しい。これからは、聞きにいくということをしたい。今日は全員でナビを回したのがとてもよかったかなと。全員が参加できるときは、回していくのがいい。ナビゲートじゃないときは、子どもたちと一緒にできたりするのが本当に幸せ。子どもたちにとっても、目先が変わっていくのもいいのかな。またこういう機会を持ちたいなど。

神前:12月が最後の参加で、1ヶ月半空いた。みんな顔つきや身長も変わっていた。みんなの様子も変わっていた。今までの中で一番集中していたように見えた。いつもよりワークも多いし、長かったけど、あれこれ言いながらも楽しんでくれた。カメラの方にも以前はあまり来なかったが、今日は2人寄って来た。Bくんが「タッチ」するとき、真っ先にえりんぎさんを誘いに行った。どこにいるか探したりして、そういう変化が微笑ましかった。Bくんは最初の頃はあっち行ったりこっち行ったりしていたが、ワークによるが、かなり参加できていた。少し気になったのは、最初のじゃんけんのあたりはどうしても大人とペアを組みたがる傾向がある。高学年の男子は子ども同士でやっていたが、今後はそこは気をつけたほうがいいのかどうか。

U(職員):1ちゃんに「Lちゃんとやってみ」と言った

ら、やっていたのでそれにびっくりした。「タッチ」のも、ちょっとやってみてたし、私からみたら「成長したなあ」と。強制されないということに安心したのかな。HくんとEくんは「ダンスだよ」と呼びに行ったら「え?」という感じだったのに、スッと参加できていたのにビックリした。いろんな理由をつけてやらへん子だけど、強制されないという安心の積み重ねでいけたのかな。Gちゃんは「今年度最後」ということに「え?」となって、寂しそうにしていた。

神前:ありのままにいられるという状態を、私たちがいかに作るかが大事ですね。

U(職員):学校とかではきちっとしなさいと言われるので、こういう場が貴重。

神前:「クールダウン」の時の感じは、ずっとあんな感じ?

隅地:シーンと静まりかえらなければいけないものではないので、その日その日のコンディションによって違うと思う。それはそれでいいと思う。

神前:今日はあまりちょこちょこ動く子はいなかったかな。

隅地:いい感じだと思いました。

U(職員):最後に子どもたちに一言ずつ感想を聞いた事について。そういうことは私たちも大事にしている。1年に1回そういう場を作っている。自分がどう思ったかを聞かれることに困ってしまったり、ためらってしまう子が多い。自分の気持ちを言葉で表現するというのは大事だなと思う。今後もぜひそういう機会を。

隅地:みんな短い言葉であっても、ちゃんと話してくれた。

U(職員):自分の言葉にしようとするところが、意外と真面目やなど。

W(職員):「お腹すいた」でも「疲れた」でもいいということが、子どもたちも安心したのかな。

神前:アンケートの回収率や、しっかり書いてあることもすごい。とても嬉しい。

U(職員):丸をつけるのはやりやすいけど、自由に書くところで一文、二文書いてあるのは、思うところがあるのかな。

神前:特にGちゃん、1ちゃんがだいぶ時間をかけて書いてくれていた。

U(職員):最後にたくさんの子が参加できたのがよかった。

神前:初めての子も参加できてよかった。「タッチ」は、特に楽しそうにやっていた。

花沙:じゃんけんの時は後出しとかしていても、それで姉妹でやっていて、楽しんでたかな。

隅地:中学生になったら、もう会えないですね。

U(職員):来年度は新1年生がいなくて、6年生が抜ける。Sちゃんとかは覗きにきたりするかも。職員も、来年度はW(職員)さんとV(職員)さんが担当になる。